

第 1 図 徳之島先史遺跡分布図

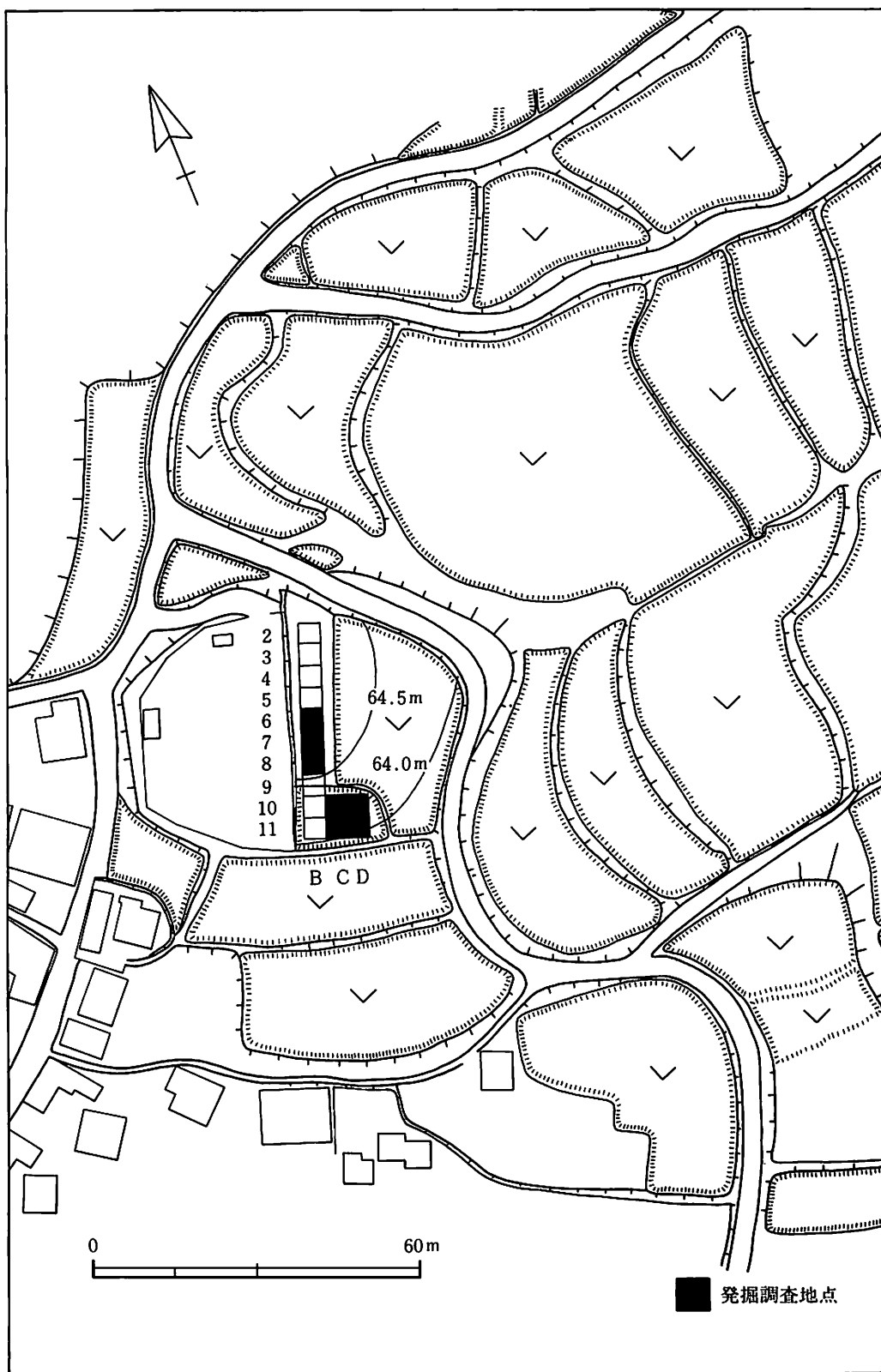
## 一、遺跡の位置と環境

城島遺跡は鹿児島県大島郡徳之島町花徳城島《ウスクバタ（テ）》2627番地に所在する。

九州の南から台湾にかけて約1300kmにわたって弧状に連なる南西諸島は、大小100余りの島々からなり、琉球弧ともよばれている。城島遺跡の所在する徳之島はそのほぼ中央、九州本土から468kmの位置にあり、島の周囲は84km、面積は248km<sup>2</sup>で、日本の島嶼中9番目の大きさである。島の東側は太平洋、西側は東シナ海に面し、島沿いに黒潮が時速6ノットで北上する。気候は亜熱帯海洋性で、一年を通じて平均気温が15～29度、年間降水量は2000mm程度であるが、各月ともよく雨が降り、特に台風による集中豪雨は1日300～400mmの雨をもたらす。植物相は、シイを極相として2次林のリュウキュウマツが栄え、ソテツやアダンのなどの南島特有の植物が群落をなす。動物相もアマミノクロウサギやハブを初め、この地域でしか見られない種が多く棲息するが、大型の哺乳動物には乏しく、中型のリュウキュウイノシシの他はネズミ大の小動物が多い。島の地形は全体的に北高南低で、井之川岳（標高645m）を主峰とする山々が島の中央に南北に連なり、その周囲を厚い所では100mを越えるという琉球石灰岩の台地が取り巻いている。台地の表面は国頭礫層とよばれる薄い砂礫や粘土の層が覆い、山間部から流れ出る雨水は平坦部が狭いために流路が短く、流れの急な河川となる。海岸部には琉球石灰岩より新しい隆起サンゴ礁が発達し、島の西岸は20～100mの断崖をなすが、東岸から南岸にかけてはなだらかな海岸段丘が広がり、その先に広い礁原が発達している（第1図）。

面縄貝塚群（第1図18～21）や犬田布貝塚（第1図23）など徳之島の代表的な先史遺跡は、このように前面にサンゴ礁の広がる段丘の開析地や砂丘上に形成されており、出土する自然遺物も魚骨や岩礁性の貝類が多い。喜念上原遺跡（第1図14）やヨヲキ洞窟遺跡（第1図22）は内陸の台地上に立地するが、貝製品や魚骨も出土しており、生業については海岸部に依拠する部分の大きかったことを思わせる。島の東北部を占める徳之島町は町内の大部分が山地形であり、発見された遺跡は海岸部を中心に立地している。

今回調査した城島遺跡は、上花徳集落を西南に見下ろす標高64.5mの小規模な台地上とその縁辺部に位置する（第2図 図版1～3上）。台地の周辺は、西側と北側が陰しい崖となり、崖下には万田川の河口から続く湿原が広がっているのに対し、台地の東側と南側は全体としてなだらかなスロープをなし、現状では階段状に削平されてサトウキビ畑となっ



第2図 地形測量図

ている。スロープの先端は約20mの落差をもって海浜に落ち込むが、海岸には約1 kmにわたって万田川と下田川の形成する砂浜が広がり、その両端には裾礫が発達している。現在は台地への昇り口が整備されているが、台地と周囲との比高は低い所でも2 m以上あり、台地に無理なく近づくことができるのは南からの道路沿いのルートだけである。調査地点は台地の頂上部であるが、大部分削平されており、特にその西半はゲートボール場として利用されているため旧地形を留めていない。

(松村)

## 二、調査の概要

### 1. 調査の目的と経過

徳之島は奄美諸島の中でも先史遺跡の調査回数が比較的多い。その中には、面縄貝塚・喜念貝塚・犬田布貝塚などのように、南島の考古学研究に非常に重要な資料を提供した遺跡も含まれている。しかし、発掘調査が行われた遺跡のほとんどは島の南部を占める伊仙町に所在するものであり、島の北半での先史時代の様相は不明な点が多かった。

こうした状況の中で、本学考古学研究室では昭和63年度の実習調査として、徳之島の西北部を占める天城町に所在する塔原遺跡の発掘調査を行い、縄文時代晩期に相当する時期の集落の一端を明らかにした。そして今回、島の東北部においても研究の歩を進めることを目的として、徳之島町に所在する城島遺跡の発掘調査を行うこととした。

城島遺跡は太平洋を眼下に望む小台地上に立地する。この台地上の西半分は現在ゲートボール場となっており、その建設時に多量の遺物が出土しているが、それによって遺跡の西半分は消滅したと考えられる。従って、今回は台地上の東半分を対象地域として発掘調査を行った。

まず、調査対象地域内に4×4 mのグリッドを設定し、名称は西から東にA・B・C…、北から南に1・2・3…とした。そのうち、B-6・7・8、C-10・11、D-10・11の合計7グリッドを発掘した。

遺跡の範囲確認を目的としたB-6・7・8グリッドでは、Ⅰ・Ⅱ層から少量の遺物、及びB-6グリッドでⅢ層を覆土とするピット1基が検出されたのみであり、遺跡の残存部の中心はより南に位置することが確認できた。

C-10・11、D-10・11グリッドは地表面の色調が周囲よりも黒ずんでおり、遺物の散

布が最も濃密に見られた地点である。Ⅰ～Ⅴ層にわたって大量の土器片、石器が出土し、また、9基の竪穴遺構、竪穴に属さない焼土のみの遺構が1基、帰属の不明確なピット多数が検出された。しかし、以前に掘削機及びトレンチャーによって激しい攪乱を受けていること、南島の真夏の強い日差しによる土壌の硬化などのために土質の差を明確に捉えられず、遺構の切り合い関係を平面的に完全に検出することは困難であった。従って、土層断面の観察を重視し、4グリッド間のセクションベルトを残したまま調査を続けたが、最終的に時間の都合によって取りはずすことができなかった。(岩崎)

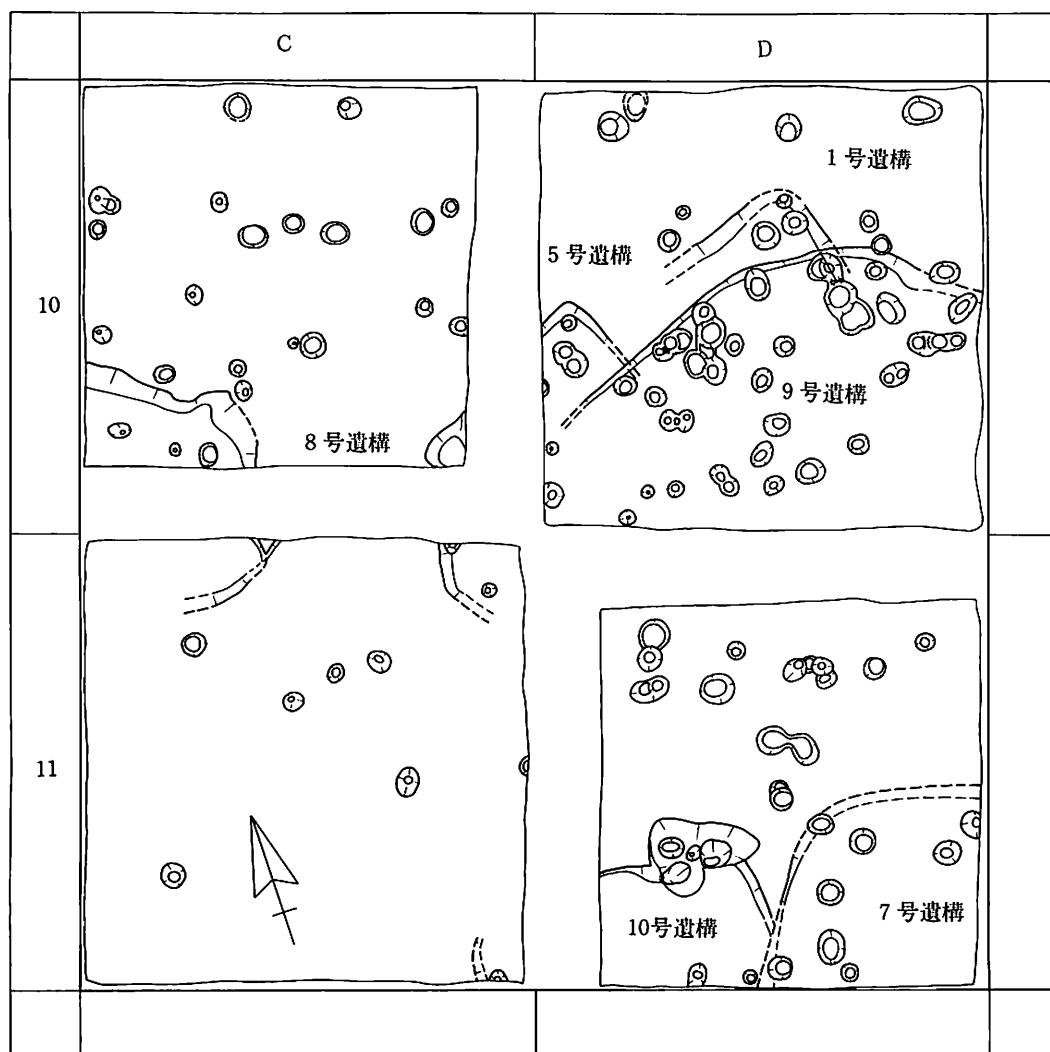
## 2. 層序 (第4図)

城島遺跡は小台地の縁辺部に立地しており、発掘区内においては遺物包含層は地形に従って北から南へ傾斜している。発掘区北側のB-6・7・8グリッドでは耕作土の下は厚い様な攪乱層で、その下は直ちに地山であった。それに対し、南側のC-10・11、D-10・11グリッドでは遺物包含層が厚く堆積しており、基本層序としてⅠ～Ⅵ層が確認された。これらの層は上層から下層へいくに従って粘性が増し、色調が明るくなる傾向が見られる。

Ⅰ層 耕作土である。厚さ約20cmで黒褐色を呈する。この層は砂を多量に含み、粘性に乏しい。遺物を多数包含しており、特に石斧が目立つ。土器片はすべて小片であり磨耗が激しい。

Ⅱ層 攪乱層である。厚さ約10～30cmで黒褐色を呈する。Ⅰ層に比べて砂の量は少ないが、同様に粘性に乏しい。この層の下面から幅約40cmの溝が掘り込まれており、部分的にはⅢ層を抜いて地山に達していた。この溝は約60～80cm間隔で平行してほぼ規則正しく並んでおり、トレンチャーによるものと思われた。さらにC-10、D-10グリッド北側ではⅡ層の底に掘削機の爪の跡が検出され、その下は直ちに地山であった。この部分のⅡ層中には明茶褐色の地山のブロックが相当量含まれていた。この層からはⅠ層よりも多くの遺物が出土したが、Ⅰ層と同様に石斧の量の多さが目立った。

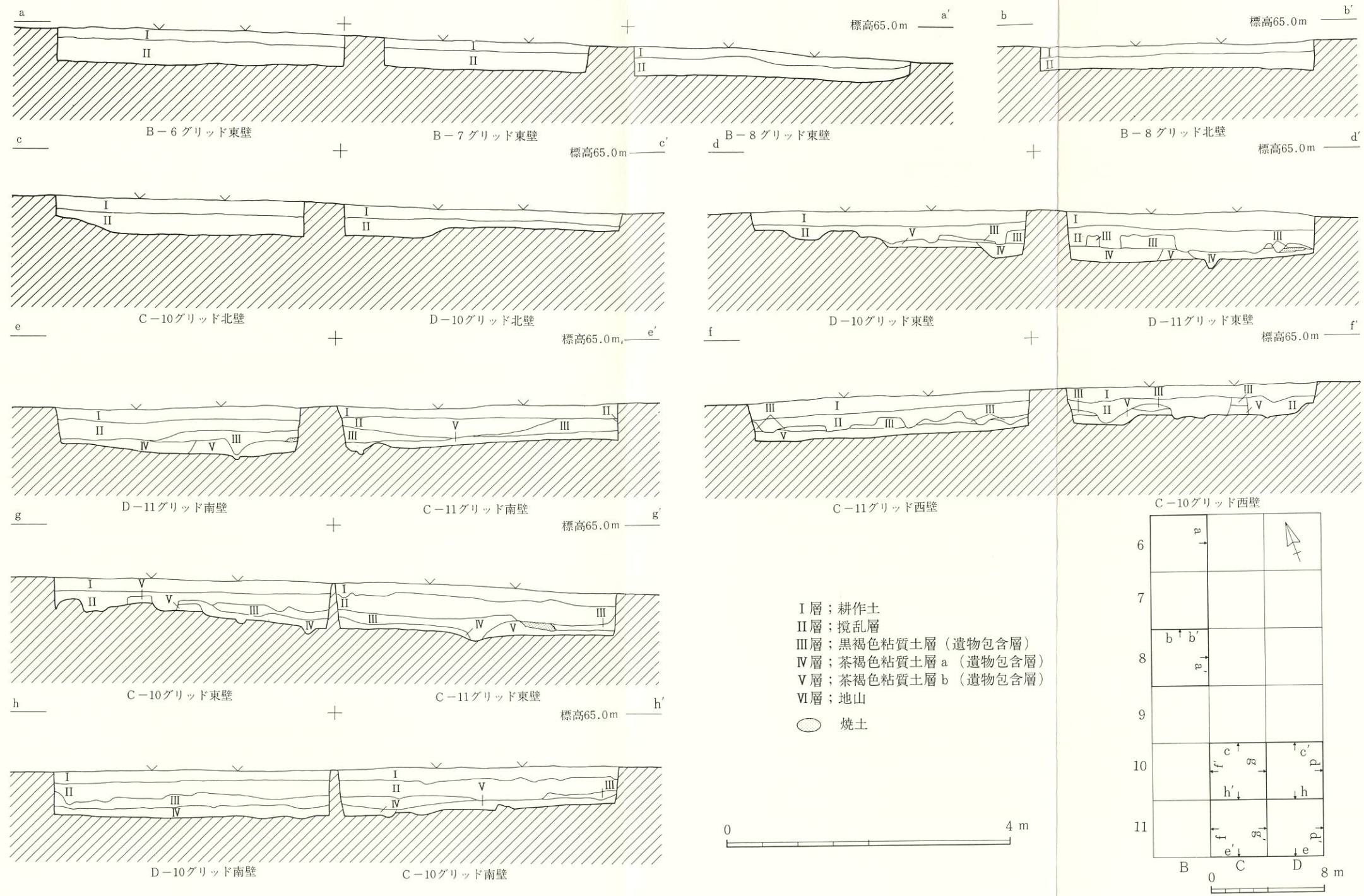
Ⅲ層 厚さ約10～20cmの黒褐色粘質土層である。前述したように、この層はC-10、D-10グリッド北側とトレンチャーによる攪乱を受けた部分には見られない。遺物としては、Ⅰ、Ⅱ層に比べて残存状態の良い大型の土器片と多くの石器が出土した。また1～4号遺構はこの層を覆土としている。



0 2 m

第3図 遺構掘り上がり図





第4図 土層断面図

IV層 この層とV層は近い時期に形成されたものと思われ、ほとんど同質の層であるが、粘性の強さに若干の差があり、IV層はV層に比べてやや粘性が劣る。このことからIV層を茶褐色粘質土層 a とし、V層を茶褐色粘質土層 b として区別した。IV層は厚いところでは約20cmを測る。遺物としては、土器の微細な破片と石器が少量出土した。5～7号遺構はこの層を覆土としている。

V層 茶褐色粘質土層 b である。厚いところでは約20cmを測る。遺物については、IV層とほぼ同様の出土状況である。8～10号遺構はこの層を覆土としている。

VI層 地山である。明茶褐色を呈しており、著しく粘性が強く、乾燥すると硬化する。

(村上)

### 三、遺 構

今回の調査では9基の竪穴遺構と1基の焼土のみの遺構、及び帰属不明の多数のピットが検出された。ただし、これらの遺構はいずれもあまり良好な状態では検出されなかった。その原因としては、遺跡が後世に激しい攪乱を受けたこと、遺構同士の切り合いが激しくしかもそれぞれの遺構覆土に差がほとんど認められなかったことが挙げられる。

#### 1号遺構（第5図 図版6下）

1号遺構はD-10グリッド中央部で検出されたⅢ層を覆土にもつ竪穴遺構である。

平面形は北壁と東壁の一部が検出されたのみだが、方形もしくは長方形と推定できる。遺構上面はかなり削平されており、周壁の最もよく残っているところで高さは約10cmである。床面はほとんど平坦だが、北から南へわずかに傾斜している。

床面からピット10基（ピット1～5・7～11）と焼土が検出された。ピットは直径約20cm程の円形で深さ15～20cmのものが多い。焼土は長径約70cmの楕円形を呈し、厚さ約6cmで皿状に堆積している。ピット1～5は周壁に沿って位置している。ピット8についても周壁に沿って位置していた可能性が高い。しかし、ピット7・9～11と焼土はその位置から遺構に伴わない可能性もある。

遺物は覆土から土器の小片と石器が少量出土した。又、焼土からも小片の土器が出土した。



## 2号遺構（第5図）

2号遺構はC-11グリッド東壁際のやや南寄りのところで検出された焼土のみの遺構である。周壁は検出されていないが、C-11グリッド東壁の土層断面の観察より、2号遺構はおそらくⅢ層を覆土にもつ竪穴遺構に伴う炉址と思われる。また、断面形よりその南側を他の遺構によって切られていると思われ、切っているのはD-11グリッド西南隅で検出された3号遺構である可能性が高い。というのは、2号遺構を切っている遺構の床面と思われる面と3号遺構の床面のレベルがほぼ一致し、平面的にみてもC-11グリッド側で3号遺構周壁は検出されていないが、3号遺構北壁がちょうど2号遺構南側に達すると推定されるからである。

2号遺構の平面形はセクションベルトにかかっているために全姿を見ることはできないが、ほぼ楕円形を呈するものと思われる。遺構上面は攪乱のため削られているが、中央部で厚さ約10cmに堆積している。

Ⅲ層を覆土にもつピットが2号遺構北側で2基（ピット12・13）が検出されたが、これらとの関連は不明である。

遺物は土器の小片が多量に含まれていた。

## 3号遺構（第5図 図版9上）

3号遺構はD-11グリッドの西南隅に検出されたⅢ層を覆土にもつ竪穴遺構である。

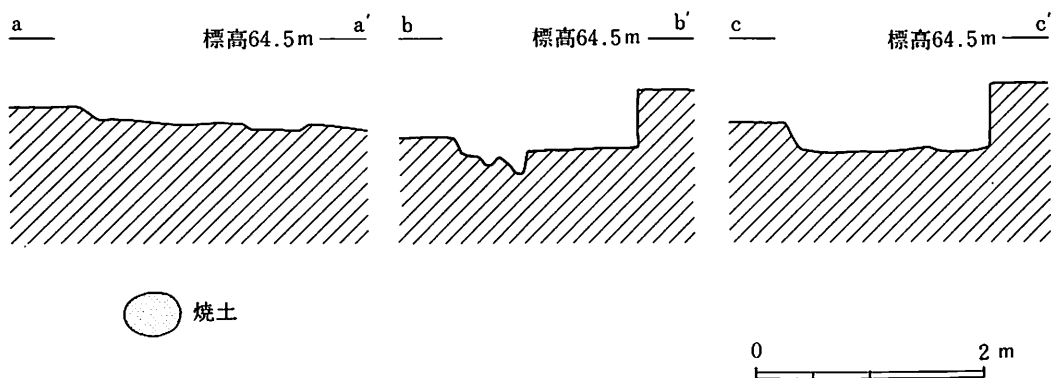
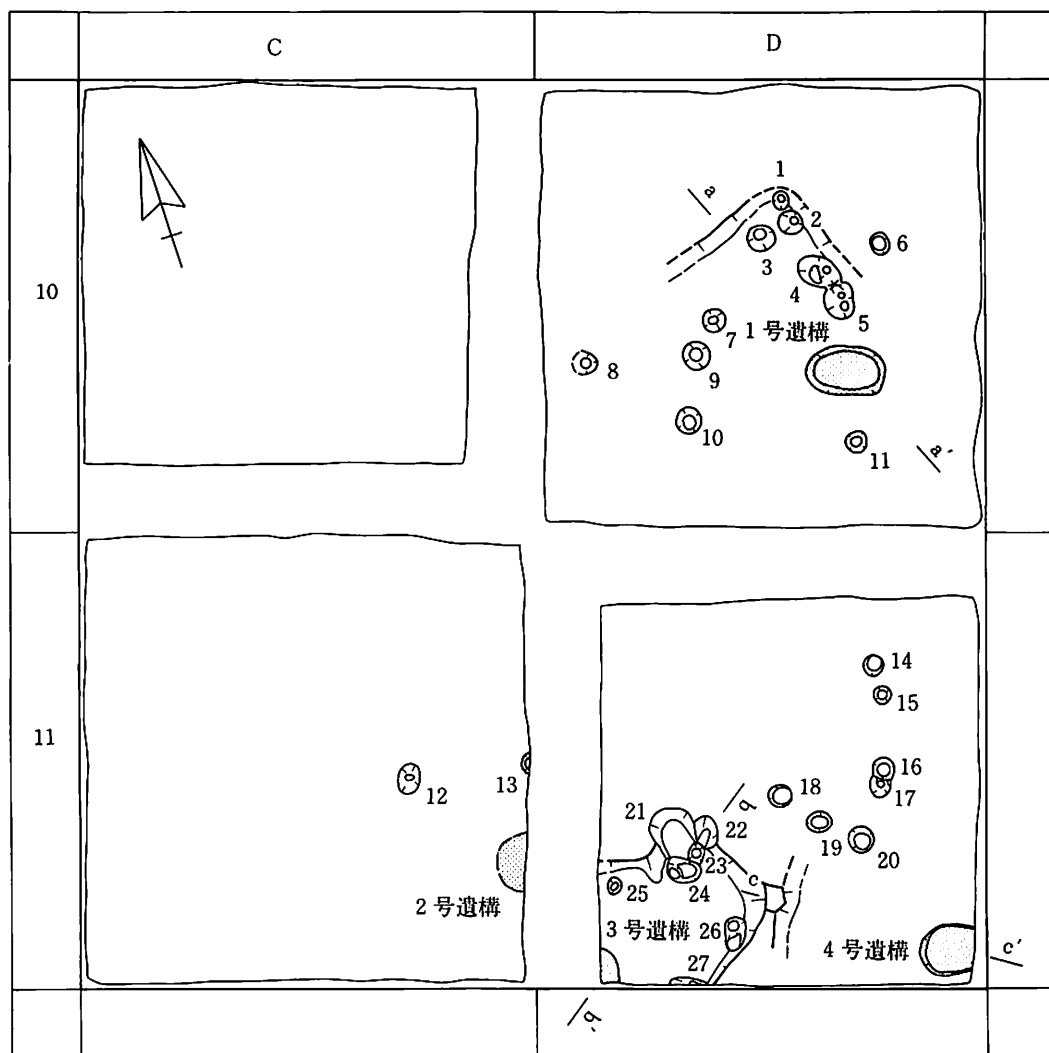
この遺構は周壁の高さが一部約30cmを測るなど、他の遺構に比べて残りが良いが、周壁の一方がC-11グリッドでは不明確で、もう一方は発掘区外へ延びているため、平面形・規模は不明である。

遺構に伴うピットは5基（ピット23～27）で、周壁に近い場所に位置している。ピット21・22は3号遺構を切っているが、その関係は明らかでない。焼土は遺構の北壁から約70cm、東壁から約80cmの所に位置するが、大部分が発掘区外へ延びるため、平面形・規模は不明である。

明らかに3号遺構に伴う遺物は、焼土内出土の土器の口縁部片1点だけである。

## 4号遺構（第5図 図版9）

4号遺構はD-11グリッドの東南隅に検出されたⅢ層を覆土にもつ竪穴遺構である。3



第5図 遺構配置図(1)  
(Ⅲ層を覆土にもつ遺構)

号遺構と同一の覆土であり、同時併存の可能性もあるが、周壁が接近しすぎている点が懸念される。

遺構の周壁は西壁の一部が約30cmの高さで残っているだけであり、平面形・規模は不明である。周壁の近くのピット群（ピット16～20）は4号遺構に伴うかどうかは明確ではない。焼土は遺構の西壁から約120cmの所に位置する。形状は長楕円形で、赤褐色を呈し、レンズ状の堆積は厚い所で約6cmを測る。

遺物は床面から土器の小片が出土している。また覆土中より土器片多数と打製石斧・磨製石斧・磨石などの石器が出土したが、分層が困難であったため、取り上げに際して7号遺構の遺物との間に混乱を生じている。

#### 5号遺構（第6図 図版7下）

5号遺構はC-10・11、D-10・11グリッドのほぼ中央部で検出されたIV層を覆土にもつ竪穴遺構である。

平面形は不整形を呈し、遺構上面はかなり削平されており、周壁の最もよく残っているところで高さは約5cmで、遺構の東南側では周壁は検出されなかった。床面は東北から西南へ緩やかに傾斜している。

当遺構に伴うと思われるピットは9基（ピット28～33・46・53・54）であるが、床面の範囲が不明確なためすべて5号遺構に伴うものかどうか不明である。ピットは直径約10cmの円形で深さ約5cmの小さいものと、直径約20cm、深さ10cm以上の大きいものがある。

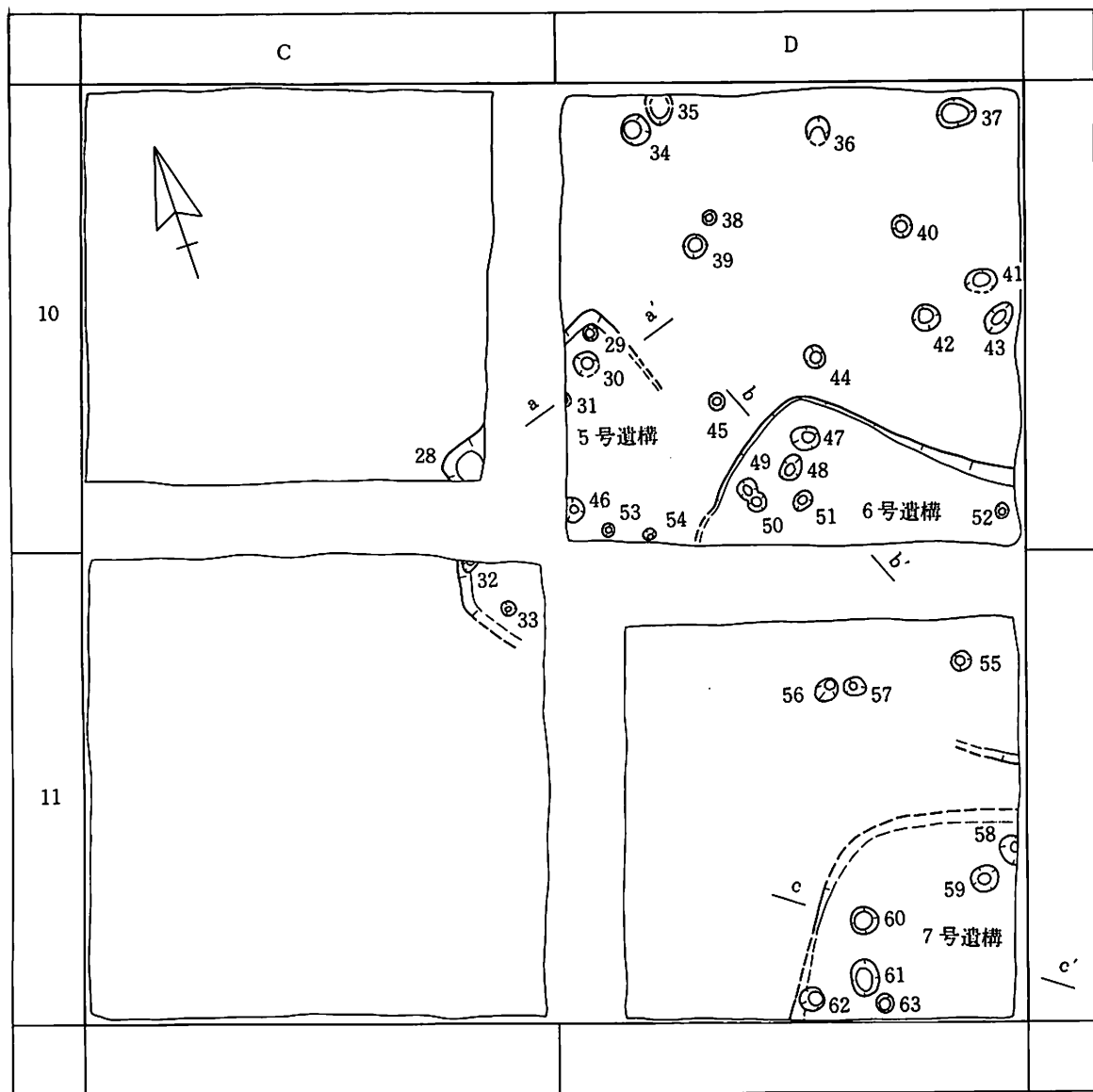
遺構内の遺物として確実なものはD-10グリッド西壁トレンチ内のものに限られ、土器の小片と石器が少量出土した。

#### 6号遺構（第6図 図版6上）

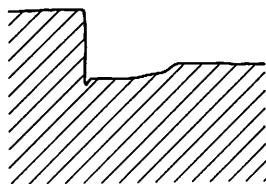
6号遺構はD-10・11グリッドで検出されたIV層を覆土にもつ竪穴遺構であり、9号遺構を切って構築されている。

遺構の南側は削平されているため検出されず、一部は発掘区外に延びるが、D-11グリッド東北隅から検出された立ち上がりも6号遺構の周壁の一部であると思われるので、平面形は長方形を呈すると推定される。周壁の高さは最もよく残っているところで約15cmである。床面はほとんど平坦だが、北から南へわずかに傾斜している。

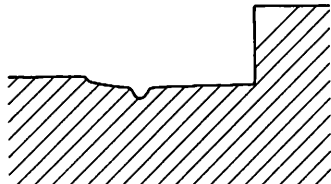
当遺構に伴うと考えられるピットは7基（ピット47～52・55）で、直径約20cmの円形で



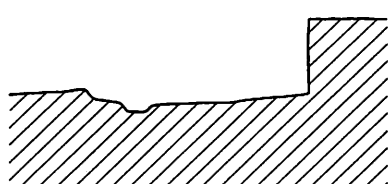
a ——— 標高64.5m ——— a'



b ——— 標高64.5m ——— b'



c ——— 標高64.5m ——— c'



第6図 遺構配置図(2)  
(IV層を覆土にもつ遺構)

0 ————— 2 m

深さ10～15cm程の浅いものが多い。また、ピット56・57は周壁の検出されていない部分にかかるので、当遺構に伴うかどうかは不明である。

遺物は覆土から土器の小片と石器が少量出土したのみである。

#### 7号遺構（第6図 図版10下）

7号遺構はD-11グリッドの東南隅に検出されたIV層を覆土にもつ竪穴遺構である。4号遺構の広がりとはほぼ重なり、7号遺構が放棄された後に、4号遺構が構築されたものと思われる。

周壁はグリッド内では西壁の一部が約50cmにわたって検出されただけであるが、D-11グリッド東壁及び南壁の土層断面に周壁の基部と思われる立ち上がりが見られ、このことから判断すると、7号遺構の平面形は方形あるいは長方形を呈するものと思われる。床面はほぼ平坦である。

遺構に伴うピットは6基（ピット58～63）である。発掘区内では焼土は見られない。

遺物は床面とピットから土器の小片が出土している。

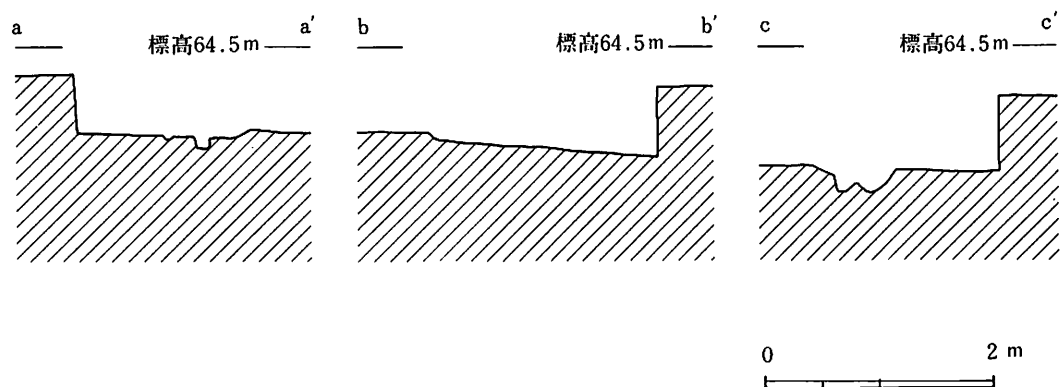
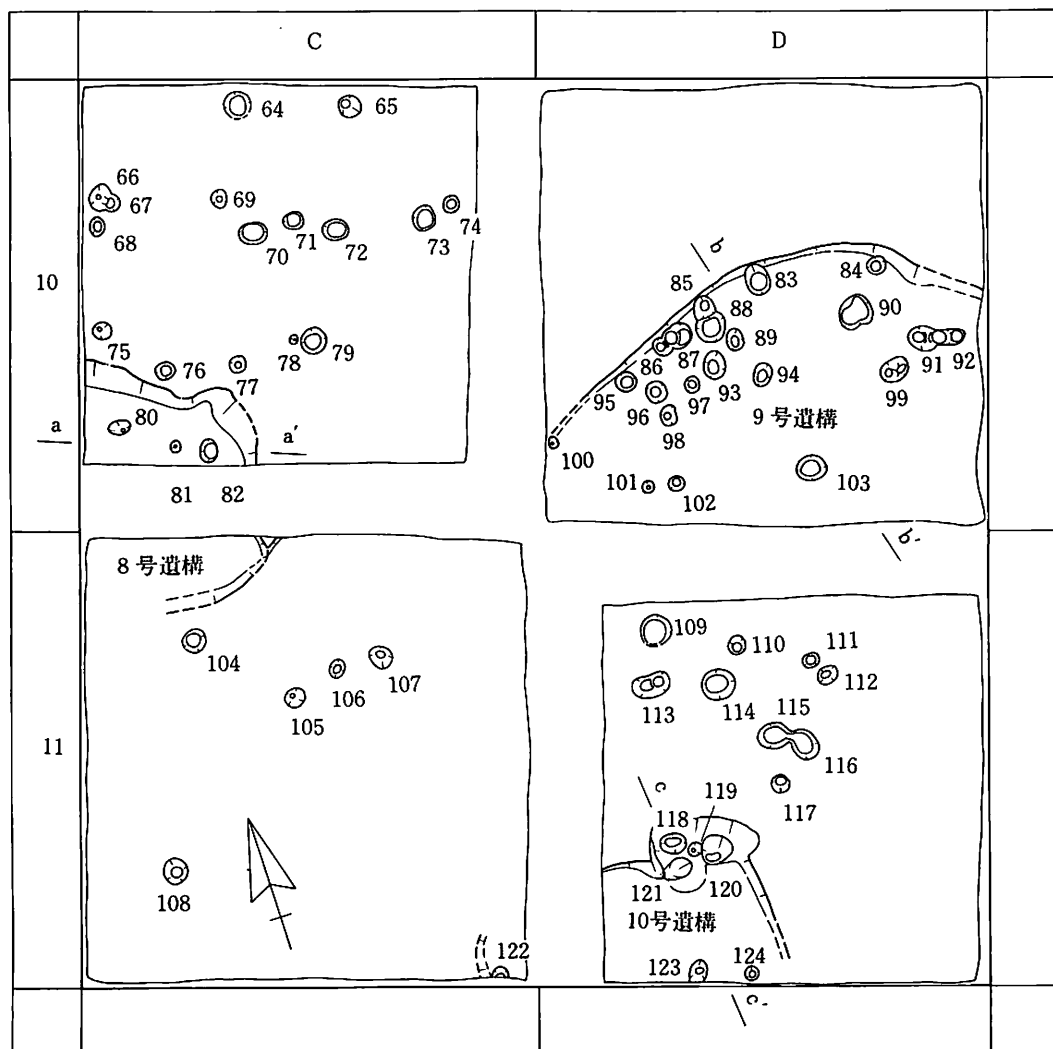
#### 8号遺構（第7図 図版4下）

8号遺構はC-10グリッドの西南隅からC-11グリッドの西北隅にかけて、セクションベルトをはさんで検出された、V層を覆土にもつ竪穴遺構である。

遺構の平面形と規模については、一部が発掘区外へ延び、一部に攪乱を受け、また周壁に不明確な箇所があるため明らかではない。ただし実測図から推測すると、平面形はやや不整な方形、もしくは長方形を呈する可能性が高く、その1辺である東南壁で長さ約200cmを測る。周壁の高さは残りの良いところで10cm程しかないが、遺構覆土であるV層が周壁の上端よりも更に上まで堆積しており、周壁の上部が後世に削平されているとは考えられない。床面は北側から南側へ向かってわずかに傾斜しているが、これは地山自体の傾斜によるものと思われる。

遺構床面からピット3基（ピット80～82）が検出された。それらはいずれも平面形は楕円形を呈し、ピット80は長径約20cm、深さ約12cm、ピット81は長径約12cm、深さ4cm、ピット82は長径約20cm、深さ約12cmである。また遺構外にも、東北側と西南側の周壁に沿ってピットが4基（ピット75～77・104）検出されたが、8号遺構との関連は不明である。

遺物は遺構覆土から土器片と石器が少量出土した。



第7図 遺構配置図(3)  
(V層を覆土にもつ遺構)

なお、C-11グリッドの北壁直下の部分で、8号遺構と別の堅穴遺構が切り合っているようだが、この部分は著しく削平されているため、別の堅穴遺構については明確にすることができなかった。

#### 9号遺構（第7図 図版7）

9号遺構はD-10グリッドで検出されたV層を覆土にもつ堅穴遺構である。遺構中央部は6号遺構によって切られている。

平面形は不整な円形か隅丸方形を呈すると思われ、今回検出された遺構の中では、最も大型のものである。遺構上面はかなり削平されており、周壁は最もよく残っているところで高さ約10cmで、ほとんどは5cm以下である。

床面からはピットが21基（ピット83～103）検出された。壁際には直径約20～30cm、深さ約20cmのピットが並ぶが、その他のものは大きさがまちまちで深さ10cm程の浅いものが多く、すべてが9号遺構に伴うものかどうか確証がない。

遺物は覆土から土器の小片、石器が少量出土したのみである。

#### 10号遺構（第7図 図版10）

10号遺構はD-11グリッドの西南隅に検出されたV層を覆土にもつ堅穴遺構である。この遺構はD-11グリッド南壁の土層断面では7号遺構に切られていることが明確で、構築の時期は7号遺構に先行するものである。

遺構の周壁は北壁と東壁の一部が検出され、最も残りの良い部分で高さ約12cmである。C-11グリッド南壁の土層断面には10号遺構のものと思われ立ち上がりが見られ、これによって遺構の北壁は長さ約180cmになるものと思われる。

この遺構に伴うことが明確なピットは3基（ピット122～124）である。ピット118～121は10号遺構を切っており、ピット21～24（第5図）と関連するものと思われるが明らかではない。焼土は発掘区内では検出されなかった。

遺物は床面から土器の小片が数点出土しただけである。

他に、前述したどの遺構にも属さないピットが多数検出されたが、これらは元来は堅穴遺構の一部を構成していたものと思われ、今回検出されたものの他にも数基の堅穴遺構が存在していた可能性が高い。

（坂本・秦・松村・森）



## 四、出土遺物

### 1. 土器（第8～11図 図版11～14）

#### 土器の分類

今回の発掘調査において出土した土器は総数約8000点であり、そのうち分類上有意義なものは約300点である。しかしその大半は小片であり、径を復原できる資料もわずかに4点のみであった。

これらをまず器形により、

A：深鉢及びこれに類するもの

B：壺及びこれに類するもの

C：鉢及びこれに類するもの

以上の3種に大別し、文様及び口縁部の肥厚の有無を中心としてⅠ～Ⅳ類に分類を行った。

Ⅰ類：有文で口縁部の肥厚するもの

Ⅱ類：有文で口縁部の肥厚しないもの

Ⅲ類：無文で口縁部の肥厚するもの

Ⅳ類：無文で口縁部の肥厚しないもの

このうち肥厚するもの（Ⅰ・Ⅲ類）については口縁部断面の形状により、a～dに細分した。

a：外器面側の肥厚部の稜がにぶく、蒲鉾形を呈するもの

b：外器面側の肥厚部の稜が明確で、全体として三角形を呈するもの

c：断面形が方形あるいはそれに近い形を呈するもの

d：肥厚が下方へとしわ寄せされ、突帯に類する形状を呈するもの

さらに有文のもの（Ⅰ・Ⅱ類）については施文部位により、イ～ホに細分した。

イ：外器面のみに施文されるもの

ロ：口唇部のみに施文されるもの

ハ：外器面及び口唇部に施文されるもの

ニ：外器面及び内器面に施文されるもの

ホ：外器面、内器面及び口唇部に施文されるもの

以上、細分を行った口縁部片の他に、頸部片・肩部片・胴部片・底部片が出土しているが、これらについては後述する。

土器の質、すなわち胎土、焼成、色調については以下の3種に大別した。

1種：胎土は均一かつ緻密である。細砂粒を多く含み、石英や雲母などの鉱物を含むものもある。赤褐色あるいは橙色を呈し、比較的焼成は良く、硬質である。

2種：胎土は均一でかつ緻密である。細砂粒、石英、雲母を含む。1種より硬度・焼成が劣る。橙色・明黄褐色を呈する。

3種：胎土に大きさの不揃いな粗砂粒を多く含む。石英、雲母などの鉱物を含むものもある。上述の1種よりさらに硬質であり、焼成は良い。褐色・黒褐色を呈する。

これらは分類上およびその基準であり、個々により多少の相違がみられる。

以下各類について記述する。

AⅠ類 口縁部が外反気味に肥厚する有文の深鉢形土器である。土器の質は1・3種である。口縁部の形状はa～cがみられ、平口縁のものに限られる。施文部位もイのみである。

AⅡ類 口縁部が肥厚しない有文の深鉢形土器である。土器の質は1種である。他の類に比して器壁の薄いものが多い。平口縁のものと山形口縁のものとがある。施文部位にはイ～ホの各種がみられる。

AⅢ類 口縁部が外反気味に肥厚する無文の深鉢形土器である。土器の質は1・2種である。口縁部の形状にはa～dがみられ、平口縁、山形口縁、山形突起をもつものがある。

AⅣ類 口縁部の肥厚しない無文の深鉢形土器である。平口縁のものに限られる。土器の質は1種に限られる。

BⅠ類 口縁部が外反気味に肥厚する有文の壺形土器である。土器の質は2種である。口縁部の形状bがみられる。平口縁のものに限られ、施文部位もイのみである。

BⅢ類 口縁部が外反気味に肥厚する無文の壺形土器である。土器の質は1種である。平口縁のものに限られ、口縁部の形状にはa～dがみられる。

BⅣ類 口縁部の肥厚しない無文の壺形土器である。口縁部が外反するものと直立するものがあり、いずれも器壁は比較的薄い。土器の質は1種である。

CⅢ類 口縁部内面が蒲鉢形に肥厚する無文の浅鉢形土器である。土器の質は1種である。平口縁のものと山形突起をもつものがある。

CⅣ類 口縁部が肥厚しない無文の浅鉢形土器である。CⅢ類より深い。土器の質は1

種である。

頸部片・肩部片・胴部片　ほとんどが器種の判別の困難な小片であるため、文様により3つに分類した。

①：斜行沈線文やハの字状沈線文などの短沈線文を施し、その下位に一条の刺突連点文を施すもの

②：斜行沈線文を基調としたもの

③：1～2条の刺突文のみによるもの

以上の分類に基づいて、各グリッド毎に所見を記述する。

### C-10グリッド（第8図 図版11）

I～V層の各層から多数の土器片が出土した。そのうち前出の「土器の分類」にあてはまるものは以下の通りである。AⅠ類a-イ（1・4・30）・b-イ（16）、AⅢ類a（26・28・29）・b（12・13・15）・c（10・27）・d（11・14）、AⅣ類（2）、BⅠ類（25）・BⅢ類b（9）、CⅢ類（17・20）、頸部片・肩部片・胴部片①（5・23・24・31）・②（8・21）・③（3・6・7・22・32）。

有文の深鉢形土器の口縁部片には、先端の鋭利な工具による短沈線文（1・21）、先端の丸い工具による刺突文（4）、数mmの幅を有するヘラ状工具による刺突列点文（30）を施すものがある。1は口縁先端に向かうにつれて器壁の厚さを減じ、内・外器面に横方向のナデ調整が施されている。焼成は良い。16は口径を復元し得るものであり、復元口径は約16cmである。文様を構成する短沈線は、いずれも下から上方向へと施されている。焼成は良い。

無文の深鉢形土器口縁部片には、平口縁（2・10・11～15・17・26・27）の他に山形口縁（28・29）がある。28は内・外器面に横方向のナデ調整が施されている。11～14・25～27は内・外器面あるいは内器面のみにナデ調整が施されるものである。10の断面には、口縁の上方を折り返して肥厚させた痕が残っている。但し、その他の口縁部片で、断面観察が可能なものはそのほとんどが粘土帯の貼り付けによって肥厚させたものである。14は肥厚部上面にナデ調整が施されている。15は径の復元が可能であり、復元口径は約8cmである。内・外器面にナデ調整が施され、肥厚部直下及び内器面下部に指頭圧痕が顕著に認められる。焼成は良い。

9は無文の壺形土器の口縁部片であり、内・外器面に丁寧なナデ調整が施されている。焼成は良い。

浅鉢には、肥厚部直下に指頭圧痕を残すもの（17）と肥厚部直下から下位にかけて丁寧に研磨されているもの（20）とがある。

頸部片・肩部片・胴部片には、先端の鋭利な工具による短沈線文・斜行沈線文を施すもの（8・21・22・32・33）と、ヘラ状工具による刺突文（6）、半裁竹管状工具による刺突文（3）及びこれらを組み合わせたもの（5・23・24・31）がある。6は押し引き気味の刺突文を施すもので、2条の横位の刺突文の間に弧状に同様の刺突文を施すもので、小片のため全体の文様構成は不明である。器壁は極めて薄く、胎土も多孔質である。23は壺形土器の頸部片である。

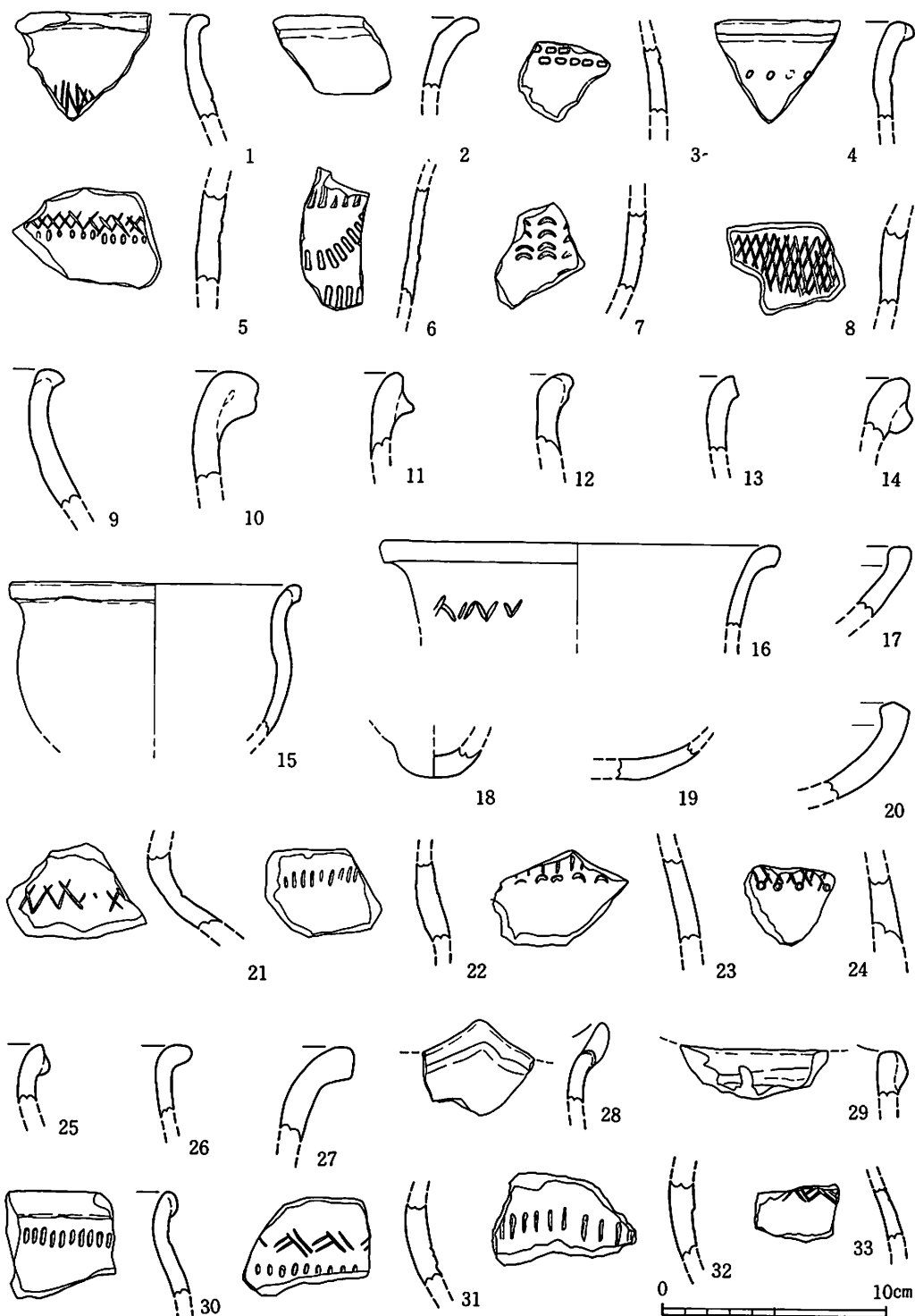
底部片については2点を図示した（18・19）。18は丸底であるが、乳房状尖底のようでもあり、胎土は極めて緻密である。19は平底である。

C-10グリッドでは、Ⅱ層から最も多量に土器片が出土している。しかし、層別には器種や文様等についての相違点はみられない。

#### C-11グリッド（第9図 図版12）

I～Vの各層から多量の土器片が出土した。そのうち前出の「土器の分類」にあてはまるものは以下の通りである。AⅠ類a-イ（57）・b-イ（51・61）・c-イ（56）、AⅡ類-イ（55・58・60）・ロ（39）・ハ（36・37・40）・ニ（50）・ホ（49）、AⅢ類a（52・53）・c（45）・d（44・46）、BⅠ類b-イ（54）、BⅢ類d（59）、BⅣ類（43・47）、CⅢ類（35・48）、CⅣ類（34）、頸部片・肩部片・胴部片③（38・41・42）。

有文の深鉢形土器の口縁部片には、刺突文のみを施すもの（36・37・39・40・61）、X字状沈線文を施すもの（55・56・58・60）、刺突文とX字状沈線文を組み合わせるもの（51）、短沈線文を施すもの（57）などがある。なお刺突文のみを施すものについては、施文具に先端の丸い工具を使用するもの（36・39）、叉状工具を用いて若干押し引き気味の刺突文（37）・2個1組の刺突文（61）を施しているものがある。また40はおそらく植物の茎を用いたものと思われ、下から上へとえぐるように刺突文を施している。49は外器面に先端の丸い工具による刺突文を横方向に2条施し、内器面にヘラ状工具による短沈線文を1条、その下に短沈線文をV字状に組み合わせで施している。調整は不明である。50は刺突文と短沈線文を組み合わせたものを、外器面上端に横方向に1条施し、その下位に放射状に施している。この横方向に施した文様を区切る形で、さらに横向きの短沈線文を縦位に連続して施している。内器面には上端に短沈線文を1条施している。しかし小片のため全体の文様



第8図 C-10グリッド出土土器実測図

II層；1～8 III層；9～17・19・22 IV・V層；21

8号遺構覆土；25～27・29～31・33 ビット70；28 ビット80；32

東壁側サブトレンチ；20・24 南壁側サブトレンチ；18・23

構成は不明である。60は径の復原が可能であり、復原口径約17cmを測る。

無文の深鉢形土器の口縁部片には平口縁のもの（44～46）、山形口縁のもの（52）、山形突起をもつもの（53）の各種がある。46は内・外器面共にヘラ状工具により丁寧に研磨されている。

無文の壺形土器の口縁部片のうち、59は口径の復原が可能であり、復原口径は約15cmを測る。口縁部を粘土帯の貼り付けにより肥厚させたものである。調整は不明である。

無文の浅鉢形土器の口縁部片には平口縁のもの（34・48）と、山形突起をもつもの（35）とがある。34・35にはナデ調整が施されていて、34は特に丁寧である。

頸部片・肩部片・胴部片のうち、42は外器面に叉状工具による刺突文が施されている。右から左方向に2条を施した後、下から上に向けて同一の工具により、少なくとも3条施している。外器面はナデ調整がなされ、内器面は軽く研磨されているが、いずれも雑なために指頭圧痕が残っている。

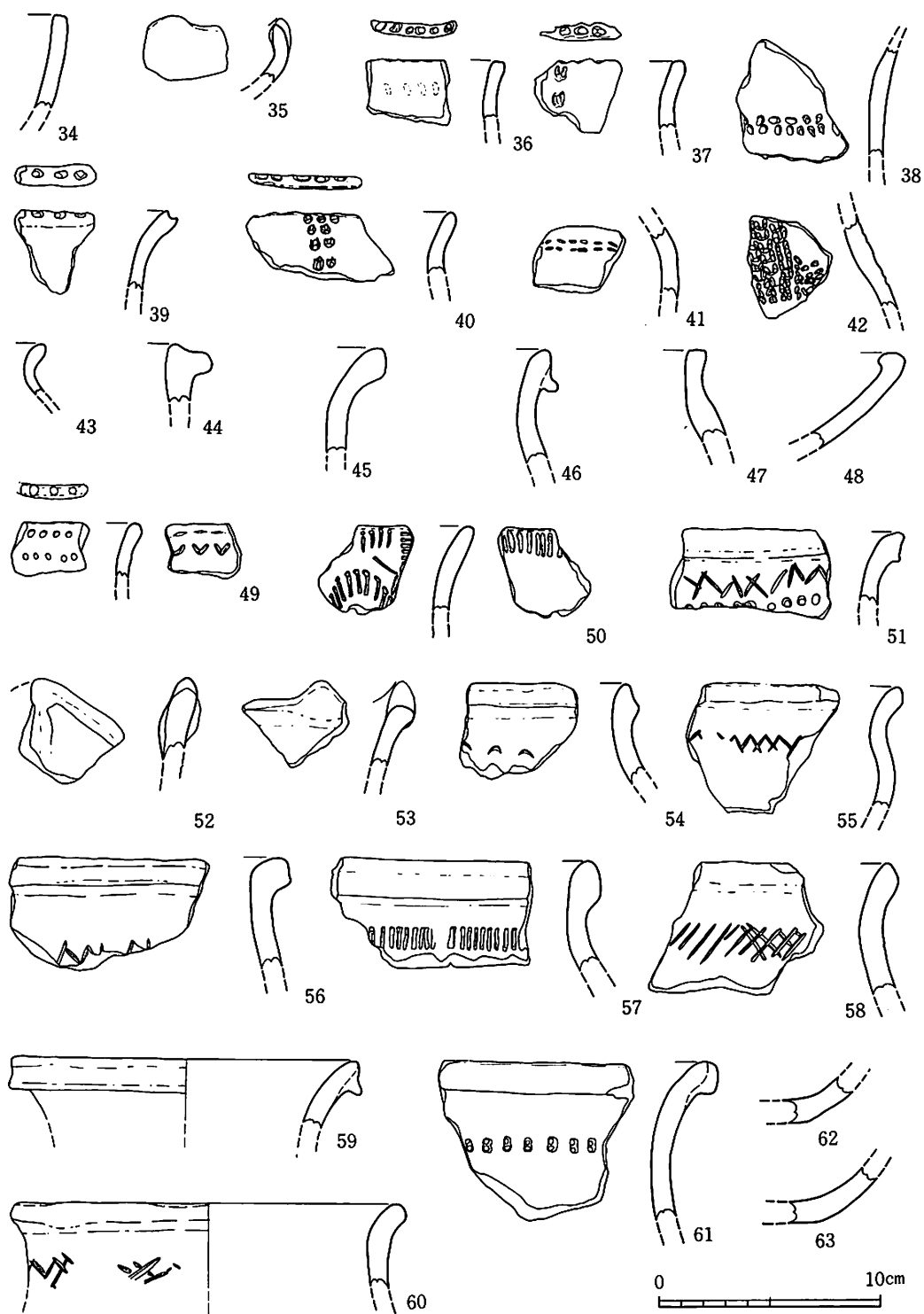
底部片については2点を図示した（62・63）。いずれも平底である。

C-11グリッドでは、出土土器数が発掘区中で最も多く、また他グリッドに比して大きな破片が目立っている。

#### D-10グリッド（第10図 図版13）

I～Vの各層から多くの土器片が出土している。そのうち前出の「土器の分類」にあてはまるものは以下の通りである。AⅠ類 a-イ（70～72・94）・c-イ（84）、AⅡ類-イ（85）、AⅢ類 a（69・81・82・92）・b（64・66・67）・c（79・91）、AⅣ類（65・68・93）、BⅢ類 c（78・83）、CⅢ類（80）、頸部片・肩部片・胴部片①（74・76・89・95）・②（73・77・86・90）・③（87・88）。

有文の深鉢形土器の口縁部片には、先端の鋭利な工具による短沈線文（70）・刺突文（72・90）、先端の丸い工具による刺突文（84）、数mmの幅を有するヘラ状工具による刺突文（71・85）を施すものがある。72は口縁部直下に交互に異なる向きで刺突文を施し、その下にも同様に刺突文を施しているようであるが、小片であるうえにかなりローリングを受けているため、詳細な文様構成及び調整の様子は不明である。85は山形突起付きの口縁部片で、口唇部の突起は口縁部より厚く丸みがあり、外器面には幅5mm程の刺突文が施されている。ナデ調整がなされ、焼成は良好である。71・84・94は断面観察により、粘土帯を貼り付けることによって口縁部を肥厚させたものであることがわかる。



第9図 C-11グリッド出土土器実測図

I 層 ; 35・37 II 層 ; 34・36・38~42

III 層 ; 43・47・49・50・52・53・60・62

IV・V 層 ; 44~46・48・51・54~59・61・63



無文の深鉢形土器の口縁部片には、平口縁のもの（64・～67・79・81・82・91～93）の他に、山形口縁（68・69）がある。68・69とも内・外器面にナデ調整が施され、焼成は良好である。平口縁のものにも内・外器面共にナデ調整が施されているが、なかでも、66には内器面に指によるナデ調整、外器面に横方向のナデ調整が施されていることがわかる。また92は内器面に指頭圧痕を残している。

78・83はいずれも無文の壺形土器の口縁部片で、ナデ調整が施されており、焼成は良好である。

80は浅鉢形土器の口縁部片で、ナデ調整が施され、焼成は良好である。

頸部片・肩部片・胴部片のうち、73は深鉢形土器の頸部片であり、内・外器面にナデ調整が施されている。76は外器面に先端の鋭利な工具により、斜行沈線文を交互に施し、その下方にやや幅のある刺突文と刺突連点文を横方向に施している。器種は不明である。77・86はいずれも壺形土器の頸部片である。75は前出の「土器の分類」にあてはまらないものと思われる。外器面に先端の鋭利な工具を用いてやや崩れた微小な有軸羽状文を施すものであるが、小片であるため全体の文様構成や器種については不明である。

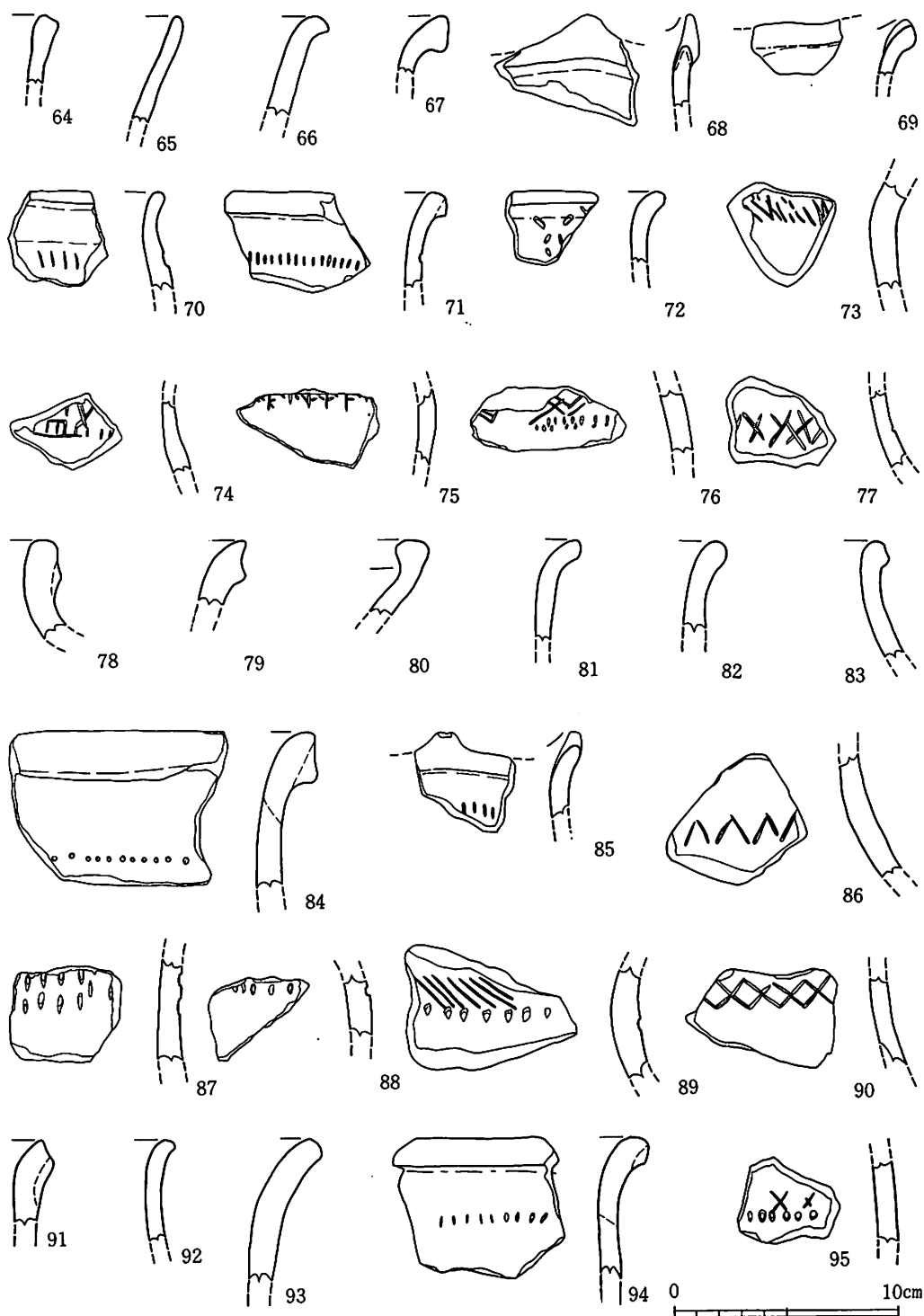
底部片については図示していないが、平底のものが1点ある。

D-10グリッドでは、他のグリッドに比して、やや小さな破片が多く、また出土土器数も少ない。当グリッドからは1・5・6・9号遺構が検出されており、各遺構の重複・切り合い関係が微妙で、それぞれの覆土中から出土した土器には、取り上げの際に混乱があったことは否めないが、器種や文様形態の差はみられない。

#### D-11グリッド（第11図 図版14）

I～Vの各層で多数の土器片が出土した。そのうち前出の「土器の分類」にあてはまるものは以下の通りである。AⅠ類a-イ（110・112・121・123）、AⅡ類-イ（98・109・111・120・124）・ロ（97）、AⅢ類a（96・115）・b（118・126）・c（107・108）・d（116）、AⅣ類（104・114・117）、BⅠ類b（122）、BⅢ類a（105・106）、CⅢ類（119）、頸部片・肩部片・胴部片①（125）・②（113）・③（99～102）。

有文の深鉢形土器の口縁部片には、刺突文のみを施すもの（97・98・120・124）、X字状沈線文を施すもの（111・123）、ハの字状沈線文を施すもの（112・121）、短沈線文を施すもの（109・110・122）がある。なお刺突文のみを施すものには施文具に先端の丸い工具を使用するもの（97・98）、先端の鋭利な工具を使用するもの（120）があり、その他に先端



第10図 D-10グリッド出土土器実測図

I層; 64・66・68・70・75 II層; 67・69・71・74・76・77

III層; 78・80・88 IV層; 79・81・83・90・93

南壁側サブトレッチ; 84~87 1号遺構覆土; 89・91~94

が3つに分かれた工具を用いて3個1組の刺突連点文を2条施しているもの(124)がある。

無文の深鉢形土器の口縁部片には平口縁(104・107・108・114～118)の他に山形突起をもつもの(96・126)がある。いずれもナデ調整が施されているが、なかでも104・107・108は特に丁寧である。107・115・118は断面観察により、粘土帯の貼り付けによって口縁部を肥厚させたものであることがわかる。96は貼り付けによって、また126は口縁部の上端を指でつまみあげることによって、それぞれ山形突起を形成している。

122は有文の壺形土器の口縁部片で、外器面に先端の鋭利な工具による横方向の短沈線を施しているが、全体の文様構成は不明である。内・外器面共にナデ調整が施されているが、内器面には指頭圧痕がみられる。

105・106は無文の壺形土器の口縁部片で、いずれも内・外器面共にナデ調整が施されている。105は粘土帯の貼り付けによって口縁部を肥厚させている。

頸部片・肩部片・胴部片のうち、102は外器面に横方向の刺突連点文を2条施している。一つの刺突文中に数条の細い条痕がみられることから、植物の茎を施文具として用いたと考えられ、上から下方向へとえぐるように施文したものと観察される。調整は不明である。

底部片については2点を図示した(103・127)。103は丸底で、外器面に横方向のナデ調整が施されている。127は上げ底気味の平底で、調整は不明である。

D-11グリッドではⅡ層中から最も多くの土器片が出土しており、他のグリッドと同様に層毎の差異はみられない。また当グリッドから3・4・7・10号遺構が検出されており、それぞれの覆土中から出土した土器には、取り上げの際、多少の混乱はみられたものの、器種や文様形態に差は認められない。

(川瀬・中嶋・渡辺・山下)

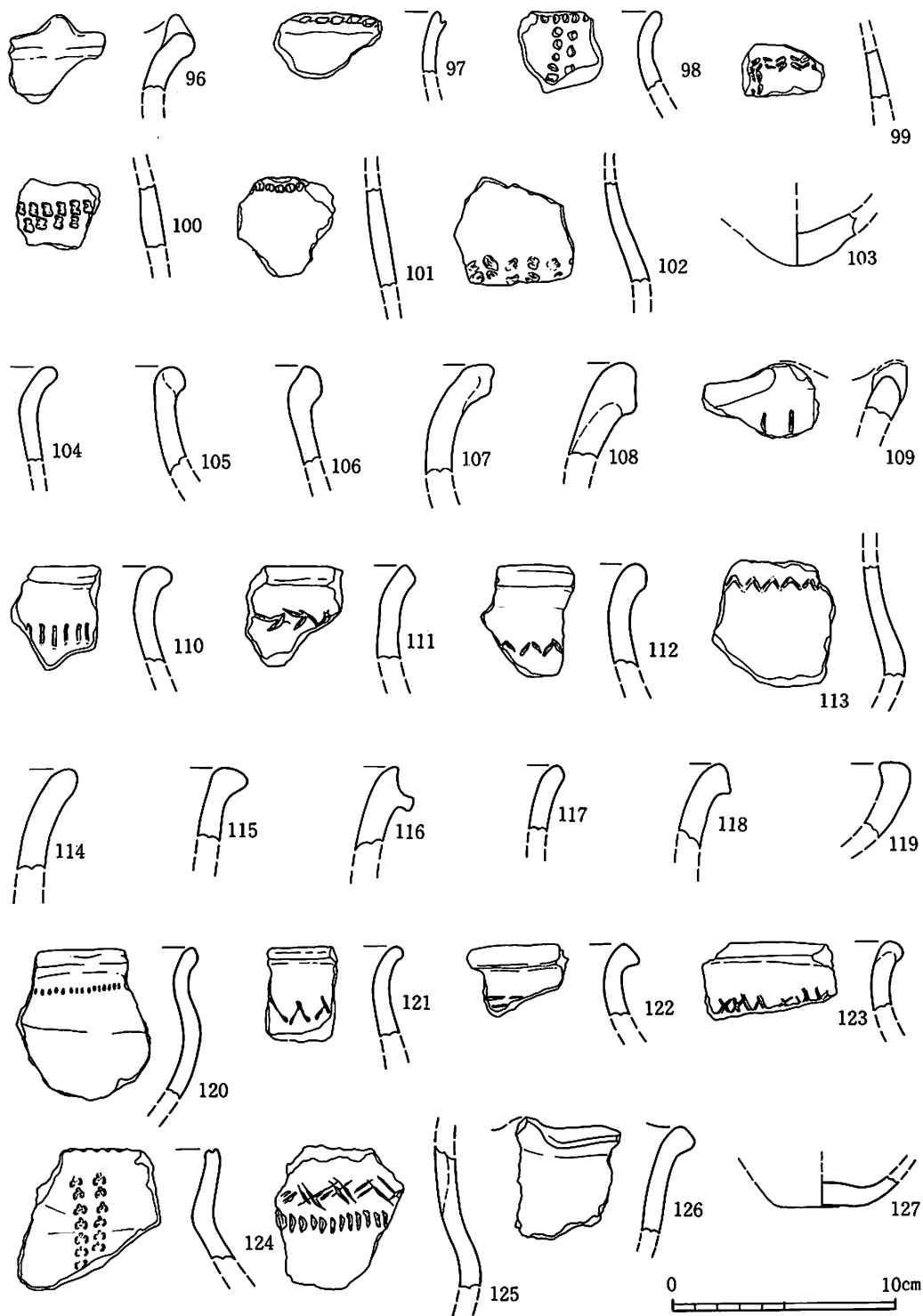
## 2. 石器(第12～14図 図版15～21)

今回の発掘調査で出土した石器は、破片を含めて石斧95、石錘1、磨石・敲石143、石皿3、砥石10、その他用途不明のもの1の計251点であり、Ⅱ・Ⅲ層を中心に出土している。それぞれの器種に関しては、以下に述べる通りである。

### 石斧(2～10、12～22)

総数95点の内訳は、打製石斧2、磨製石斧88、未製品5点である。石斧はまず大きく打製石斧と磨製石斧の2つに分けることができる。

打製石斧は共に平面形が長方形に近く、扁平な形を呈している(36・43 図版15上・16



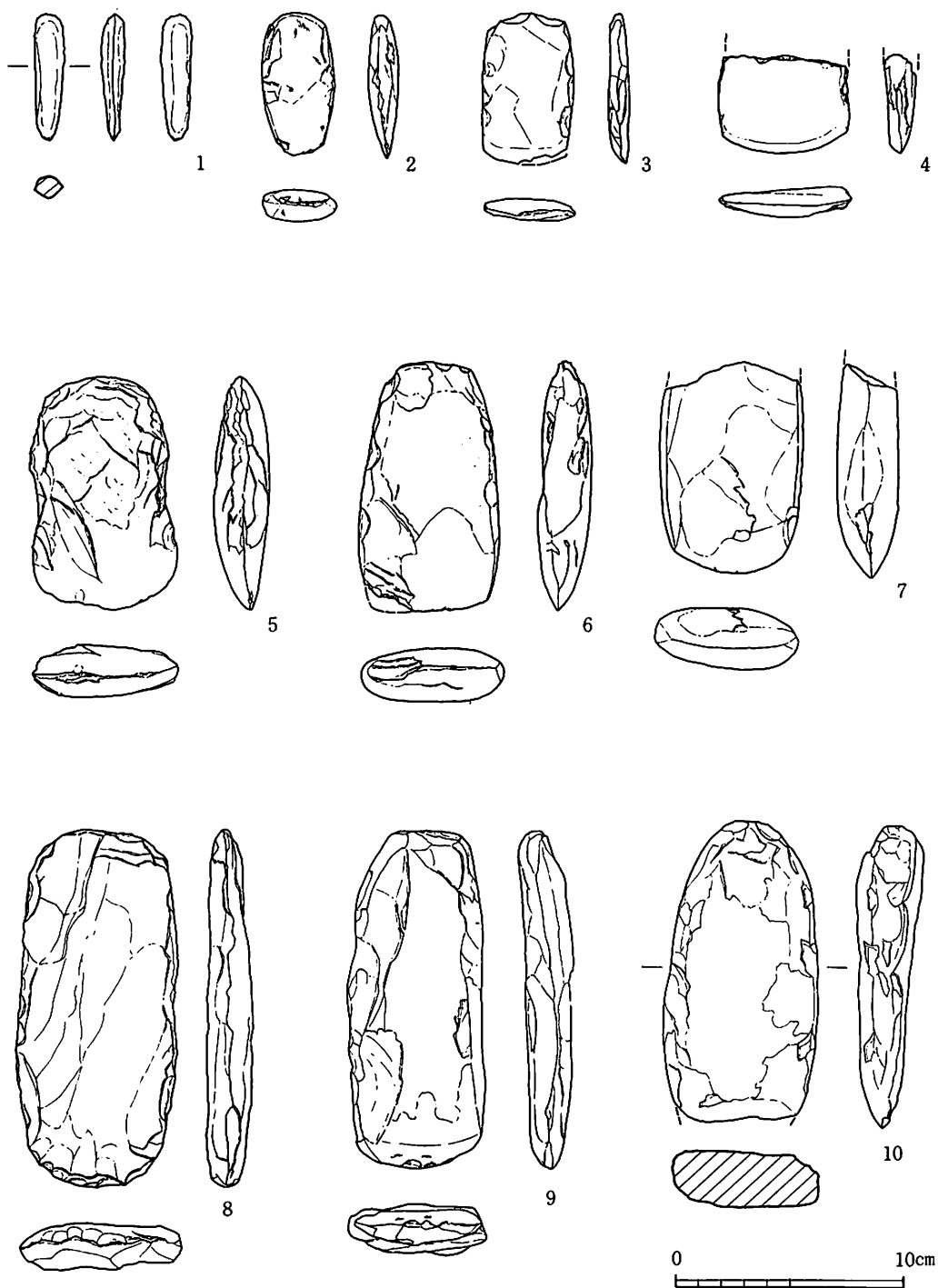
第11図 D-11グリッド出土土器実測図

I 層; 96・101 II 層; 97~100・102・103 III 層; 104・105・107・109~111・113 IV・V 層; 106・108・112  
3・10号遺構覆土; 117~119・123・124・126・127 4・7号遺構覆土; 114~116・120~122・125

下)。43はやや大型のもので刃部は大きく欠損している。36は中型のもので完形品であり、刃部の調整は粗い。いずれも粘板岩製である。

磨製石斧はその大きさから、小型・中型・大型の3つの形態に分けることができる。小型のものとしては2・3を図示している。2は両刃で、全面が磨研されており、表裏面と側面との境には明確な稜がつくり出されている。刃部の磨研は特に丁寧であり、細かい刃こぼれが多数みられる。3は片刃で、裏面は全面が磨研されており、表面は刃部と基部の一部のみが磨研されている。これら小型の石斧は、絶対数が少ない中であえて言うならば、2のようにやや厚みのあるものよりも、3のように扁平な石斧の方が多くみられるようである。

中型の石斧としては、4～6・12～17・20～22を図示している。4は片刃で、基部を大きく欠損しており、原形は留めていない。表面はわずかに凹んでいるが、裏面は丸みを帯び、一部に自然面を残している。刃部には細かい刃こぼれが多数みられる。5は片刃で、表面は部分的に、裏面は全体的に磨研されており、その他の部分には打ち欠いただけの簡単な調整が行われている。両側縁にはわずかに抉りが入っている。刃部には全体的に刃こぼれがみられる。6は片刃に近い両刃を呈しており、刃部左端は使用によって大きく欠損し、随所に刃こぼれもみられる。側面には、敲打による調整痕がみられる。12は両刃で、裏面は基端から2/3近くまで薄く剥落している。刃部には多数の刃こぼれがみられる。13は片刃で、刃部は大きく欠損し、表面の残存している部分には刃こぼれがみられる。14は刃部と、側面の下から1/3程は丁寧に磨研されているが、その他の部分はほとんど磨研されていない。裏面は大きく剥落しており、刃部の形状は不明であるが、表面は鋭く研ぎ出されている。15は両刃で、表裏面は側面に対し垂直でどの面も磨研されている。刃部には細かい刃こぼれが多数みられる。16は両刃で、表面は部分的に磨研されているが、その他の部分には敲打による調整痕がみられる。裏面は基部の一部が剥落しているが、全体的に磨研が施されている。17は片刃で、刃部と裏面の一部が粗く磨研されていることはわかるが、風化が激しく、その他の部分については不明である。20は両刃で、刃部には丁寧な磨研が施されている。表面は刃部を除き、全体的に剥落しているため、磨研の状態は不明である。裏面の磨研は粗く、一部大きく剥落している。21は片刃で、表裏面とも全面に磨研が及んでいるが、刃部には特に丁寧で、鋭く研ぎ出されている。右側面は欠損しているため明確ではないが、左側面の上から1/3あたりには凹みがあり、着装のためのものと考えられる。22は両刃で、基部は剥落している部分が多いが、所々磨研された部分が残っ



第12図 出土石器実測図(1)

C-11グリッド II層; 6 III層; 1・4 IV・V層; 2  
 D-10グリッド I層; 9 1号遺構覆土; 7  
 D-11グリッド II層; 8・10 III層; 5 東壁側サブトレンチ; 3

ている。刃部はほぼ完全に残っており、多数の刃こぼれがみられる。18は未製品である。おおよその形には成形されているが、細かい調整の段階にまでは達しておらず、刃部もまだ明確に作り出されてはいない。これら中型の石斧のグループは、平面形がバチ形を呈し、基端が丸みをもつもの（4・6・12・13・15・16）と、平面形がほぼ長方形を呈しているもの（14・17・20～22）の大きく2つに分けられる。18については後者に属するものと思われるが、断定はできない。前者には4・12・13・15のように全面が磨研されているものと、5・6・16のように、刃部と基部の一部のみが磨研されているものがあるが、後者には全面が磨研されているものはない。数量から言えば、この中型のタイプの石斧が最も多く、その中でも、平面形が長方形を呈するものが多く見られる。また図には掲載されていないが、基部のみが残っている石斧で、その端部が平坦面をなす石斧もある。

大型の石斧としては、7～10・19があげられる。7は片刃に近い両刃を呈しているが、基部は大きく欠損している。全面丁寧に磨研されているが、表面は一部剥落している。8は未製品である。刃部はまだ研ぎ出されておらず、その他の部分も磨研されていないと思われるが、風化が激しく詳細は不明である。9は片刃で、刃部、右側面の下方、左側面の上方は丁寧に磨研されているが、基部の磨研は粗く、裏面はほとんど磨研されていない。10は刃部が大きく欠損しているが、両刃であったと考えられる。刃部の磨研は丁寧で、裏面も磨研されている。表面は刃部以外にも一部磨研が確認できるが、風化が激しく詳細は不明である。19は片刃で、左側面は大きく欠損しているため確認できないが、右側面には大きな横位の凹みがあり、この部分も丁寧に磨研されている。裏面の刃部から基部の一部にかけては、欠損している。以上の大型の石斧には、表面形が長方形に近く、薄手のもの（8・9）、やや丸みを帯びているもの（7・10・19）があるが、いずれも刃部が鋭利な様子を留めているものはほとんどなく、潰れているものが多い。磨研は刃部と基部の一部にみられるものが大部分を占め、19のように全面が磨研されているものは極めて稀である。

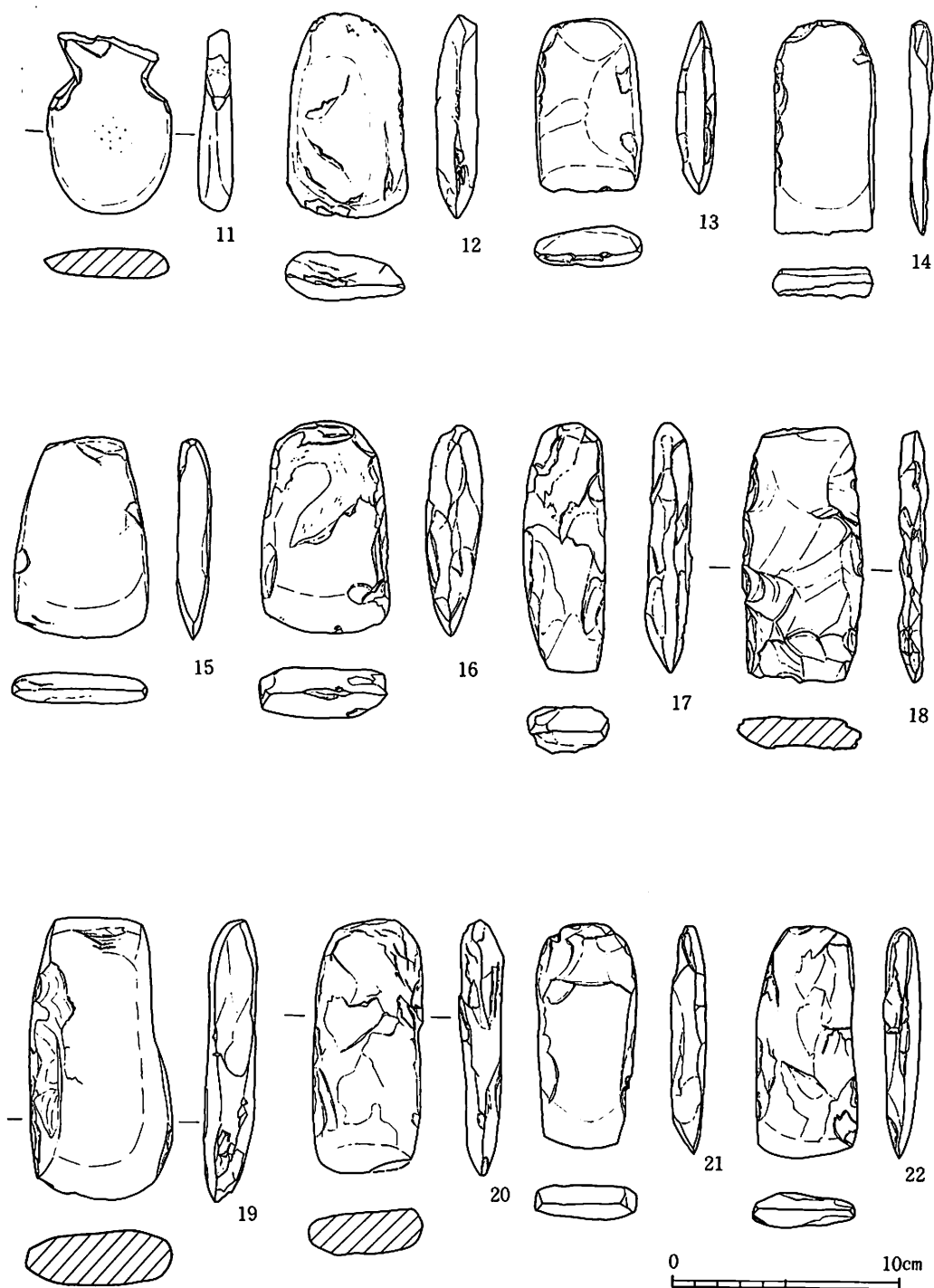
石斧の石材については凝灰岩質粘板岩の使用が最も多く、次いで泥岩質粘板岩、砂岩質粘板岩が使用されている。大型の石斧には砂岩質粘板岩が多く使用されているが、中型、小型の石斧においては、大きさによって選択的に特定の石材が使用された様子はみられない。

なお、石斧の詳細な法量に関しては、後出の表を参照して頂きたい（表1・2）。

#### 石錘（11）

上部は欠損しており、全形は不明である。側面には深い抉りが入っているが、着装によ





第13図 出土石器実測図(2)

- C-10グリッド II層; 22 III層; 15  
 C-11グリッド IV・V層; 16  
 D-10グリッド I層; 18 II層; 17・20・21  
 D-11グリッド I層; 12 II層; 13 III層; 14 IV・V層; 11

るためか挟りの部分は磨耗している。表裏面とも中央部には敲打による調整痕がみられる。下部先端には、細かい縦方向の擦痕が多数確認できる。

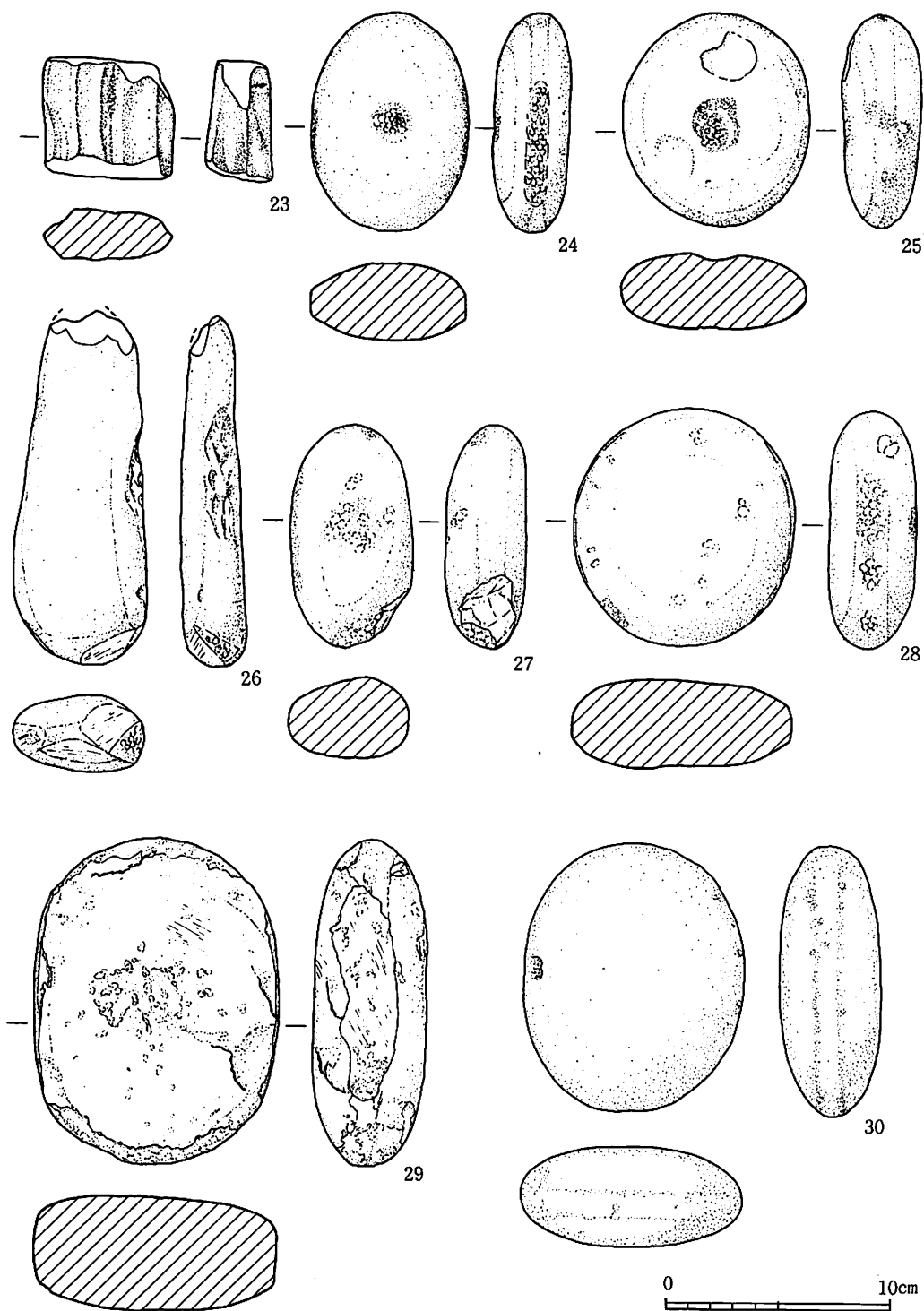
#### 磨石・敲石（24～30）

総数143点のうち、全形を伺い知ることができるものを、形状から次の5類に分類した。

第1類 平面形が楕円形を呈するものであり、これは更に横断面が楕円形を呈するものと扁平なものに分けられる。确实には40点がある。重量は最小57gから最大1300gのものがあ、重さから横断面が楕円形のものは大・中・小に、扁平なものは中・小に分けられる。主に側縁を使用部としており、表面もしくは表裏面の中央部に敲打による凹みを有するものは、横断面が楕円形のものの大・中型に限られる。石材は大部分が石英斑岩であり、他に粘板岩系統のものが5点存在する。図示したものでは24・29が第1類に属する。24は横断面が楕円形を呈するものである。両側面に顕著な擦痕を有し、両平面の中央部にも敲打による浅い凹みを有する。重量は355gで、石材は石英斑岩である。29は両側面に顕著な擦痕を有しており、その使用面が特に広いもので横断面形は長方形を呈している。重量は1235gで、石材は石英斑岩である。

第2類 平面形がほぼ円形を呈するものであり、やはり横断面が楕円形を呈するものと扁平なものがある。确实には26点がある。重量は最小114gから最大1170gのものがあ、横断面が楕円形のものは大・中・小に、扁平なものは中・小に分けられる。やはり主として側縁を使用部としており、表面もしくは表裏面の中央部に敲打による凹みを有するものは、第2類でも横断面が楕円形のものの大・中型に限られる。石材は大部分が石英斑岩であり、他に泥岩質粘板岩と凝灰岩質粘板岩が各1点存在する。また、受熱したものが1点あ。図示したものでは25・28・30が第2類に属する。25は右側縁にわずかに擦痕を有し、また表面には深い、裏面にはやや浅い敲打による凹みを有する。重量は358gで、石材は石英斑岩である。28は側縁のほぼ全周に擦痕及び敲打痕がみられる。重量は585gで、石材は石英斑岩である。29は右側縁にわずかに擦痕を有するのみである。重量は790gで、石材は石英斑岩である。

第3類 棒状を呈するものである。确实には11点があり、その多くが下端部を使用部としており、敲打痕がみられる。石材は石英斑岩が7点、粘板岩系統が3点、結晶片岩が1点あ。図示したものでは26・27が第3類に属する。26は下端部に擦痕及び敲打痕を有しており、その擦痕は特に明瞭で面をなしている。重量は458gで、石材は泥岩質粘板岩あ。27は下端部に敲打痕がみられ、また使用によると思われる剥落も見られる。重量は



第14図 出土石器実測図(3)

C-10グリッド III層; 28

C-11グリッド II層; 23・27・30 IV・V層; 24・25

D-11グリッド III層; 26・29

251 g で、石材は石英斑岩である。

第4類 不整形な形態を呈するものである。確実には10点があり、全面に擦痕を有するものもある。また石斧・磨石などの破損面を磨面として使用しているものもこの類に含めた。石材は石英斑岩は3点のみで、他はすべて粘板岩系統である。

第5類 平面形は角の円い三日月形を呈し、横断面は三日月形の平坦な辺の方がややすばまる偏楕円形を呈するものである。いわゆるクガニ石に似た形態を有する。下縁に擦痕を有するものがほとんどである。3点があり、いずれも大型で完形のものは3362 g を量る。石材はいずれも石英斑岩である。

### 砥石 (23)

総数9点が出土しており、形態には3種がみられる。石材には砂岩と石英斑岩がある。

1種めは有溝砥石であり、23が1点出土した。23は横断面が6角形を呈する柱状の砥石である。6面すべてが使用面であり、表裏面と図の左側2側面の計4面に各1本ずつ幅約9 mmの溝がある。石材は砂岩である。

2種めは横断面が長方形を呈する柱状の砥石であり、1点出土した。表裏両面が使用されている。石材は砂岩である。

3種めは厚さ1～3 cmの板状の石材を使用した砥石であり、7点が出土した。表面1面のみを使用したものが大部分であり、側面、裏面をも使用したものが各1点ずつある。石材はいずれも石英斑岩である。

### 石皿

3点出土した。使用面が広く浅いものと、深く狭いものがある。

前者は2点出土しており、いずれも破損品である。

後者は1点出土しており、やはり一部を欠損している。径約35cm、厚さ約10cmの半球形に近い石材を用い、その球面側の中央に径約18cm、深さ約4 cmに深く凹んだ使用面がある。

### その他の石器 (1)

用途不明の石器である。表面左側に一部磨研面を残しているが、その他の部分は敲打による調整がなされている。全体的に風化し、刃部は鋭利さに欠ける。

(新谷・横山・岩崎)

## 五、まとめ

城島遺跡の今回の調査で確認された点を項目毎にまとめてみることにする。

まず遺構については、竪穴住居址9基、竪穴に属さない焼土のみの遺構1基、帰属の不明確なピット多数が検出された。これらの遺構の在り方についてみると、発掘調査区の南側に集中していることが指摘できよう。遺構の大半が発掘調査区の南側にあたるC-10・11、C-10・11グリッドで検出されたのに対し、北側のB-6～8グリッドではわずかにピット1基が検出されたのみである。地形的に発掘調査区の北側部分が若干高くなっているために遺跡の北半が既に削平された可能性もあるが、遺構の集中の度合いをみてもやはり遺跡の中心は台地上の南側の区域にあると考えられる。また発掘調査区に隣接するゲートボール場建設の際に、やはり南側～西側の縁辺部に偏ってかなりの量の遺物が出土したことが伝えられていることから、このことは首肯されよう。さらに推察を重ねると全体的な遺跡のプランとしては、海岸部（東側）に向かって半円形あるいは馬蹄形に開いた集落を想定できる。

各住居址の規模や平面形を完全に追うことはできなかったが、得られた幾つかの手懸りを元にして復原すると、一辺が2.5～3mほどの隅丸方形もしくは長方形を呈する竪穴住居址の可能性が強い。このような小型の住居址群の例としては、ほぼ同時期のものとして喜界島ハンタ遺跡など<sup>(1)</sup>が挙げられる。また各遺構に伴う遺物の内容には差はみられず、各遺構の覆土にもほとんど差がなかったことから、比較的短期間に営まれた集落であると考えられる。発掘調査を行ったわずかな面積内に、少なくとも10軒以上の竪穴住居址が検出されたことと併せて、時間的にも場所的にもこの地に集中した先史集落の存在が伺えるが、この集中の理由については現在のところ明らかにすることはできない。

出土遺物には、約8000点の土器、約260点の石器があり、その量は発掘面積に比してかなり多い。土器は深鉢、壺、鉢の各器種があり、その中では深鉢が80%と出土土器中の主流をなし、次いで壺12%、鉢8%との器種構成になっている。これらの土器は、無文土器の形式からみて、宇宿上層式土器の範疇に含まれるものと考えられる。但し、それに伴う有文土器については、従来の調査では伴出例の多い喜念Ⅰ式は1点も出土しておらず、城島遺跡で今回出土した有文土器は喜念Ⅰ式土器よりも後出するものとも考えられる。類例としては、同じ徳之島町内のナーデン当遺跡の一例<sup>(2)</sup>が知られるにすぎないため、今後の調

査に進展をまっけて、判断することとしたい。

石器は、狩猟具はみられず、磨石・敲石や石皿といった植物加工具が多い点に注意され、当遺跡における植物質食糧への依存度の高さが伺えよう。また総数260点以上、石斧だけでも95点を数えるという石器全体の量の多さも注目される。発掘面積の狭さにもかかわらず、これほどの量の石器が出土した例は稀である。これら多量の石器の意義を考えることは、遺跡の性格を考慮するうえで大変重要であるが、未製品はほとんど見られないなど、特に石器製作所といえるような材料もなく、明快な答えを見いだすことはできない。

石材については、徳之島は奄美諸島の中では、喜界島・沖永良部島のような全体が隆起サンゴ礁から成る石材を産出しない島々とは対照的に、地質的には南部は隆起サンゴ礁から成っているものの、島の北部には花崗岩、粘板岩、凝灰岩、緑色岩類などの層の存在が知られており、城島遺跡付近でも粘板岩・凝灰岩互層があることが知られている。つまり石材の入手は他の島々に比して容易であったことが推察される。このことは、今回出土した石材はすべて徳之島産の石材を用いたとして差し支えないという鑑定の結果からも支持されよう。また石斧には粘板岩系統を、磨石・敲石には石英斑岩を用いているものが大部分であり、石器の用途による石材の選択性が伺える。

以上各項目について述べてきたが、最後には城島遺跡の立地と併せ、遺跡全体についてまとめてみる。城島遺跡は万田川の河口から続く湿原を臨む台地上に占地しており、また珊瑚礁原の広がる海岸へも近い。河口付近に広がる汽水域やサンゴ礁原は魚介類の採取に、湿原は根菜系の植物の採取に、それぞれ適した自然環境であることが知られており、このような環境に依拠した生活であったことが推測される。その一方で、遺跡が立地している台地は周囲が崖によって隔絶されており、周辺との交通には不便であるともみることができる。そのような場所に住居を構えた理由としては集落の防御に便利であったためと考えるのが妥当であろう。同時期の類似した立地条件をもつ遺跡としては、徳之島東岸の本川遺跡などが挙げられる。

奄美地域の先史遺跡は「前面に広い礁原を臨み、入江の口を扼しながらしかも清水に事欠かぬ砂丘の上にあり、背後に相当面積の湿原と、そのさらに背後に広い台地状地形が拡がっていることが多い」と言われる<sup>(3)</sup>が、徳之島における先史遺跡の分布もこれに齟齬しないものである。面縄遺跡群などの大型で永続的な集落は上述の条件を十分に満たしていると言え、一方城島遺跡や本川遺跡などの小集落は、上述の条件をある程度満たしてはいるものの、さらに自衛をも考慮しつつ居住地を選択せざるを得なかったと考えられる。ま

た島の西海岸においては、先史遺跡の立地が時期によって異なることが従来より指摘されている<sup>(4)</sup>。すなわち、縄文時代後・晩期に相当する時期の遺跡は海岸段丘上に、弥生時代相当期以降の遺跡は標高25m以下の砂丘上に立地する傾向がみられる。縄文時代後・晩期以降に遺跡数が非常に増加することと、こうした遺跡立地の変化とを併せてこの時期に生活体系に大きな変化があったことが考えられている。城島遺跡はちょうどこの変化が起こった時期の遺跡であるが、その要因を立証する積極的な理由は現在のところみつかっておらず、食糧加工具が多い点、河口や汽水域に固定した生活を予想させる立地条件などがわずかな手懸りとして得られているにすぎない。今後のさらなる研究の進展を待ちたい。

(山下・岩崎)

註(1). 白木原和美「喜界島の半田の住居址」『東アジアの考古と歴史 中』(岡崎敬先生退官記念論集) 1989年

熊本大学文学部考古学研究室『ハント遺跡 付喜界島遺跡分布調査』研究室活動報告21 1986年

註(2). 鹿児島県教育委員会「奄美地区埋蔵文化財分布調査報告書Ⅰ 昭和62年度」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書 (49)』1989年

註(3). 白木原和美「奄美先史学の当面する諸問題」『琉大史学』第6号 1974年

註(4). 熊本大学文学部考古学研究室『玉城遺跡』研究室活動報告19 1985年

同

『塔原遺跡』研究室活動報告23 1989年

表 1 出土石器計測表(1)

挿図・ 図版番号	器種(刃部形状)	登録番号	計 測 値				石 材	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	磨製石斧(両)	89TU56	( 6.3)	3.1	1.3	( 36.5)	粘 板 岩	ほぼ完形。刃部に刃こぼれ有り。
3	" (片)	89TU38	( 6.5)	4.0	0.8	( 38.5)	凝灰岩質粘板岩	ほぼ完形。刃部の一部を欠損。
4	" (片)	89TU28	( 4.3)	5.7	1.1	( 45.4)	凝灰岩質粘板岩	基部を欠損。
5	" (片)	89TU70	10.2	6.2	2.3	229.6	凝灰岩質粘板岩	ほぼ完形。両側縁に挟り有り。
6	" (片に近い両)	89TU20	10.8	6.2	2.2	259.7	凝灰岩質粘板岩	ほぼ完形。刃部に大きな刃こぼれ有り。
7	" (片に近い両)	89TU40	( 9.2)	6.1	2.5	(232.3)	砂岩質粘板岩	基部を欠損。全面に丁寧な磨研。
8	未製品	89TU30	15.6	7.0	1.8	324.8	砂岩質粘板岩	刃部は潰れている。風化激しい。
9	磨製石斧(片)	89TU22	(14.6)	6.0	2.2	(331.8)	砂岩質粘板岩	刃部が潰れている。風化激しい。
10	" (両)	89TU15	(13.1)	6.8	2.9	(338.0)	砂岩質粘板岩	刃部を欠損。風化激しい。
12	" (両)	89TU19	9.0	5.1	1.8	132.3	泥岩質粘板岩	完形品。
13	" (片)	89TU30	7.6	4.6	1.6	99.8	凝灰岩質粘板岩	ほぼ完形。刃部に刃こぼれ有り。
14	"	89TU18	( 9.4)	4.4	(0.9)	( 73.5)	砂岩質粘板岩	主面の片方が大きく剥落。
15	" (両)	89TU30	8.7	5.7	1.4	134.4	砂岩質粘板岩	完形品。刃縁に細かい刃こぼれ有り。
16	" (両)	89TU56	9.3	5.7	2.3	211.1	凝灰岩質粘板岩	完形品。刃縁に使用による潰れ有り。
17	" (片)	89TU13	10.9	3.6	1.8	188.8	砂岩質粘板岩	完形品。
18	未製品	89TU22	11.2	5.4	1.1	102.8	泥岩質粘板岩	整形過程中。
19	磨製石斧(片)	89TU24	(12.5)	6.0	2.1	(281.6)	泥岩質粘板岩	刃部を欠損。磨研丁寧。
20	" (両)	89TU22	11.0	4.9	(1.8)	(165.5)	泥岩質粘板岩	刃部の一部を欠損。
21	" (片)	89TU13	10.0	4.5	1.2	105.5	泥岩質粘板岩	完形品。刃部に細かな刃こぼれ。
22	" (両)	89TU18	10.2	4.4	1.3	101.4	凝灰岩質粘板岩	完形。磨研は主に刃部周辺のみ。
32	" (両)	89TU61	( 5.2)	6.3	(2.2)	(104.6)	砂岩質粘板岩	基部を欠損。円刃。
33	" (両)	89TU24	8.1	2.9	1.2	( 46.0)	凝灰岩質粘板岩	刃部の一部が欠損。刃部付近の磨研丁寧。
34	"	89TU53	( 5.4)	4.3	1.4	( 57.9)	砂岩質粘板岩	刃部・基部を欠損。
35	"	89TU18	( 5.0)	(3.4)	(1.8)	( 37.7)	泥岩質粘板岩	刃部の一部のみ残存。細かい刃こぼれ。
36	打製石斧	89TU 3	9.3	4.3	1.1	68.0	泥岩質粘板岩	両側縁の稜明確。刃部粗い。
37	磨製石斧(片)	89TU50	(10.6)	4.7	0.9	( 62.0)	泥岩質粘板岩	刃部のほとんどを欠損。
38	"	89TU35	(10.2)	5.9	(2.6)	(200.8)	泥岩質粘板岩	刃部・基部を欠損。
39	" (片)	89TU 5	( 6.7)	4.8	(1.2)	( 46.7)	粘 板 岩	基部を欠損。風化激しい。
40	" (片に近い両)	89TU20	( 8.1)	5.8	( 1.9)	(155.7)	凝灰岩質粘板岩	基部を欠損。刃部全体に刃こぼれ有り。
41	"	89TU49	( 8.4)	(4.8)	(1.4)	(112.5)	泥岩質粘板岩	刃部・基部を欠損するなど損傷激しい。
42	" (片)	89TU23	( 8.3)	5.3	1.5	(111.8)	凝灰岩質粘板岩	基部を欠損。刃縁に刃こぼれ有り。
43	打製石斧	89TU20	(12.6)	6.0	1.8	(165.2)	粘 板 岩	刃部欠損。両側縁の稜明確。
44	磨製石斧(両)	89TU20	(12.0)	5.7	2.2	(223.6)	粘 板 岩	刃部を欠損。風化激しい。
45	" (両)	89TU26	( 4.8)	(6.1)	(1.5)	( 56.9)	粘 板 岩	刃部のみ残存。刃こぼれ有り。
46	" (両)	89TU26	( 7.3)	(6.3)	(1.3)	( 47.4)	泥岩質粘板岩	刃部のみ残存。刃縁は非常に鋭利。
47	" (両)	89TU36	( 9.9)	5.5	2.6	(216.9)	凝灰岩質粘板岩	刃部の一部を欠損。
48	"	89TU54	( 9.9)	4.4	2.4	(172.3)	砂岩質粘板岩	刃部を欠損。
49	"	89TU56	(16.1)	6.3	2.0	(351.7)	凝灰岩質粘板岩	刃部を欠損。
50	"	89TU38	( 4.6)	(5.1)	(1.6)	( 47.6)	凝灰岩質粘板岩	基部のみ残存。
51	"	89TU36	(13.5)	5.4	2.8	(301.1)	凝灰岩質粘板岩	刃部を欠損。全面に丁寧な磨研。
52	"	89TU27	( 9.5)	6.4	2.4	(255.6)	粘 板 岩	刃部を欠損。
53	" (両)	89TU94	( 9.5)	3.7	1.7	( 78.2)	粘 板 岩	風化激しい。
54	" (両)	89TU44	( 4.9)	(4.9)	( 2.1)	(58.3)	砂岩質粘板岩	刃部の一部のみ残存。刃縁は潰れている。
56	" (両)	89TU27	(11.0)	4.7	1.8	(162.8)	凝灰岩質粘板岩	刃縁を欠損。磨研は刃部周辺のみ。
57	未製品	89TU30	( 6.5)	(4.4)	1.2	( 44.4)	凝灰岩質粘板岩	全面に粗い剥離。
58	磨製石斧(両)	89TU 8	( 7.3)	4.9	(2.4)	( 94.9)	凝灰岩質粘板岩	基部を欠損。刃縁に細かい刃こぼれ。
59	"	89TU 8	( 9.6)	4.9	1.6	(114.1)	凝灰岩質粘板岩	刃部を欠損。風化激しい。
61	"	89TU68	( 7.3)	(6.0)	(1.7)	(124.0)	凝灰岩質粘板岩	基部を欠く。風化激しい。
62	"	89TU30	(13.2)	5.9	2.5	(297.9)	凝 灰 岩	ほぼ完形。刃部に大きな刃こぼれ有り。
63	未製品	89TU48	( 7.6)	(4.6)	(2.3)	(105.6)	石 英 斑 岩	基部のみ残存。全面に丁寧な磨研。



表2 出土石器計測表(2)

挿図・ 図版番号	器種(刃部形状)	登録番号	計 測 値				石 材	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
64	磨製石斧	89TU15	( 8.3)	8.3	1.9	(173.6)	砂岩質粘板岩	刃部を欠損。全面に丁寧な磨研。
65	"	89TU15	( 9.4)	5.6	1.5	(134.0)	泥岩質粘板岩	ほぼ完形。刃部に大きな刃こぼれ有り。
68	"	89TU65	( 9.7)	4.8	2.6	(221.2)	凝灰岩質粘板岩	刃部を欠損後、磨石に転用している。
69	"	89TU67	( 8.2)	3.1	( 1.3)	( 35.1)	泥岩質粘板岩	主面の片方を欠く。全体に丁寧な磨研
70	" (片)	89TU48	8.8	3.7	0.9	44.4	凝灰岩質粘板岩	ほぼ完形だが、石材の風化激しい。
71	" (両)	89TU70	10.0	6.0	( 1.1)	(101.4)	砂岩質粘板岩	刃部を完全に残すが、主面全体を剥落。
72	"	89TU62	( 7.0)	4.3	1.5	( 74.5)	凝灰岩質粘板岩	刃部を欠く。
73	"	89TU48	(12.1)	5.4	2.5	(258.9)	凝灰岩質粘板岩	刃部の一部欠損。
74	" (両)	89TU44	(11.4)	5.5	2.1	(195.6)	砂岩質粘板岩	刃縁は使用によって潰れている。
75	"	89TU11	(12.4)	4.9	2.6	(299.6)	凝灰岩質粘板岩	ほぼ完形。刃部に使用による潰れ有り。
76	" (片に近い両)	89TU44	13.6	6.0	3.0	407.6	石英斑石	刃部の一部欠損。
	"	89TU15	( 9.7)	5.9	2.3	(189.6)	砂岩質粘板岩	刃部欠損。風化激しい。
	"	89TU16	( 9.5)	( 5.0)	1.8	(123.7)	凝 灰 岩	刃部を欠損。風化激しい。
	"	89TU17	( 6.5)	4.7	0.8	( 43.6)	泥岩質粘板岩	刃部を欠損。
	"	89TU19	( 8.4)	( 6.0)	2.8	(205.6)	凝灰岩質粘板岩	刃部を欠く。風化激しい。
	"	89TU22	( 7.6)	8.7	1.7	(150.1)	泥岩質粘板岩	基部・刃部を欠損。風化激しい。
	" (両)	89TU23	7.8	3.0	1.1	( 41.9)	粘 板 岩	刃部の一部を欠損。風化激しい。
	"	89TU26	( 8.6)	3.3	0.9	( 57.5)	泥岩質粘板岩	ほぼ完形。刃部は完全に潰れている。
	"	89TU26	( 7.1)	( 6.6)	2.1	(140.3)	凝灰岩質粘板岩	基部のみ残存。風化激しい。
	"	89TU26	( 5.3)	( 5.4)	1.7	( 78.0)	泥岩質粘板岩	基部を欠損。風化激しい。
	"	89TU27	7.1	3.9	0.6	29.4	粘 板 岩	ほぼ完形。刃部に細かい刃こぼれ。
	"	89TU28	( 5.5)	4.0	1.1	( 40.4)	砂岩質粘板岩	刃部・基部を欠損。
	" (両)	89TU28	( 4.2)	( 4.7)	( 1.1)	( 32.7)	凝灰岩質粘板岩	刃部のみ残存。特に円刃である。
	"	89TU32	( 8.2)	3.2	0.7	( 36.4)	凝灰岩質粘板岩	刃部を欠損。
	" (両)	89TU34	( 6.1)	( 3.9)	( 2.0)	( 69.1)	砂岩質粘板岩	刃部の一部のみ残存。
	" (両)	89TU37	( 4.8)	2.7	1.2	( 20.8)	泥岩質粘板岩	基部のみ残存。
	" (両)	89TU39	11.8	( 4.6)	( 1.1)	(105.0)	泥岩質粘板岩	損傷激しい。刃部の一部残す。
	"	89TU39	( 5.1)	( 4.6)	( 1.5)	( 44.8)	砂岩質粘板岩	基部のみ残存。
	"	89TU42	( 6.8)	2.2	( 0.6)	( 30.7)	粘 板 岩	両側縁のみ原状を残す。
	"	89TU44	( 8.8)	( 6.2)	2.6	(181.4)	砂岩質粘板岩	基部と刃縁を欠く。
	"	89TU45	( 3.2)	( 5.8)	( 1.3)	( 42.2)	砂岩質粘板岩	刃部・基部を欠損。
	未製品	89TU47	( 8.9)	4.4	2.1	(107.3)	凝灰岩質粘板岩	風化激しい。
	磨製石斧(両)	89TU48	( 4.9)	4.4	( 1.5)	( 53.7)	凝灰岩質粘板岩	刃部のみ残存。刃こぼれ有り。加工少ない。
	"	89TU48	( 9.7)	5.4	1.9	(151.2)	砂岩質粘板岩	刃部を欠損。風化激しい。
	"	89TU48	( 7.2)	6.0	2.3	(162.3)	泥岩質粘板岩	刃部・基部を欠損。
	"	89TU53	( 5.5)	( 4.8)	1.8	( 83.6)	砂岩質粘板岩	刃部・基部を欠損。
	"	89TU65	(10.8)	5.0	2.7	(243.3)	砂岩質粘板岩	刃部を欠損。風化激しい。
	"	89TU69	( 6.9)	( 8.0)	1.6	(154.3)	砂岩質粘板岩	基部を欠損。刃部は完全に磨滅している。
	"	89TU75	( 6.2)	( 3.7)	1.0	( 34.0)	泥岩質粘板岩	刃部を欠損。風化激しい。
	"	89TU82	( 8.3)	( 4.8)	2.2	(134.3)	泥岩質粘板岩	刃部を欠損。風化激しい。
	"	89TU82	( 6.6)	( 4.5)	3.0	(137.6)	粘 板 岩	基部のみ残存。全面に丁寧な磨研。
	"	89TU91	( 5.2)	( 4.5)	( 1.3)	( 44.0)	凝灰岩質粘板岩	基部のみ残存。
	" (片に近い両)		( 3.9)	( 4.0)	( 0.9)	( 21.8)	砂岩質粘板岩	刃部のみ残存。
	"		( 7.2)	( 5.3)	( 1.3)	( 52.8)	粘 板 岩	基部を欠損。風化激しい。
	"		( 8.1)	( 6.6)	1.0	( 79.6)	泥岩質粘板岩	刃部を欠損。風化激しい。
	" (両)		12.6	5.7	1.2	128.9	泥岩質粘板岩	風化激しい。

表3 出土石器計測表(3)

挿図・ 図版番号	器 種	登録番号	計 測 値				石 材	備 考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
24	磨 石・敲 石	89TU56	9.7	6.9	3.4	355	石 英 斑 岩	第1類 両側縁に擦痕。表裏面に敲打による凹み。
25	"	89TU36	9.3	8.1	3.4	358	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕。裏面に敲打による凹み。
26	磨 石・敲 石	89TU70	15.5	6.0	2.9	458	泥 岩 質 粘 板 岩	第3類 下端部に擦痕及び敲打痕。
27	"	89TU26	9.7	5.1	3.6	251	石 英 斑 岩	第3類 両側縁に擦痕。下端に敲打による剥落あり
28	磨 石・敲 石	89TU80	10.2	10.0	3.8	585	石 英 斑 岩	第3類 両側縁に擦痕。表面に敲打による浅い凹み
29	"	89TU31	14.6	10.6	5.1	1235	石 英 斑 岩	第1類 両側面に擦痕。下端に敲打痕有り。
30	磨 石	89TU27	11.8	9.7	4.5	790	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕
55	"	89TU41				( 48)	粘 板 岩	小破片
66	"	89TU98	5.2	5.2	1.8	78	粘 板 岩	第3類 石材の折断面を磨面としているようである。
77	"	89TU 1	8.3	7.2	3.5	307	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕
78	"	89TU48	8.4	6.9	2.6	249	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
79	磨 石・敲 石	89TU39	(11.2)	7.3	3.4	( 435)	石 英 斑 岩	第3類 側面に擦痕。下端部を敲打により欠損。
80	磨 石	89TU27	11.3	9.1	4.8	789	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
81	磨 石・敲 石	89TU23	11.0	8.5	4.0	621	石 英 斑 岩	第1類 両側面に擦痕。下端に敲打痕。
82	磨 石	89TU54				( 298)	石 英 斑 岩	小破片
83	磨 石・敲 石	89TU38	9.8	8.9	4.8	593	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕
84	磨 石	89TU 4	13.1	11.2	5.2	1300	石 英 斑 岩	第1類 両側面に擦痕
85	"	89TU56	8.3	6.1	2.4	187	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
86	"	89TU56	6.6	5.9	3.6	213	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕
87	磨 石・敲 石	89TU36	13.5	( 8.4)	( 3.4)	( 474)	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕。表面に敲打による凹み。
88	磨 石	89TU20	9.3	6.1	3.6	304	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
89	"	89TU74	11.9	10.3	5.6	( 953)	石 英 斑 岩	第2類
90	"	89TU89	9.6	6.2	3.1	286	石 英 斑 岩	第1類 風化激しい
91	"	89TU68	7.3	5.1	3.4	233	泥 岩 質 粘 板 岩	第1類
92	"	89TU97	6.8	6.1	2.7	174	石 英 斑 岩	第2類 受熱している。
93	"	89TU40	6.4	5.9	3.8	217	石 英 斑 岩	第2類
94	"	89TU90	9.8	7.6	3.8	400	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
95	"	89TU41	10.2	9.7	4.3	689	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕
96	磨 石・敲 石	89TU29	12.5	10.4	5.3	876	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕。表面に敲打による凹み。
97	磨 石	89TU16	8.6	6.2	2.1	168	石 英 斑 岩	第1類
98	"	89TU11	8.0	6.4	2.8	214	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
99	"	89TU 8	6.4	4.8	2.8	128	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
101	"	89TU70	12.3	10.5	5.5	1110	石 英 斑 岩	第2類 両側面及び上下縁に擦痕
	"	89TU 6	9.2	7.7	2.2	226	泥 岩 質 粘 板 岩	第4類
	"	89TU 8	( 4.8)	6.4	2.7	( 138)	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
	"	89TU 8	10.8	9.8	4.1	( 667)	石 英 斑 岩	第2類 風化激しい
	"	89TU11				( 30)	石 英 斑 岩	小破片
	磨 石・敲 石	89TU11	10.0	8.5	5.1	656	石 英 斑 岩	第1類 数箇所に敲打による剥落有り。
	磨 石	89TU11				( 50)	粘 板 岩	小破片
	"	89TU15				( 88)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU15	7.0	6.4	2.8	206	泥 岩 質 粘 板 岩	第2類
	"	89TU15	7.6	5.8	2.7	178	石 英 斑 岩	第1類
	"	89TU15				( 76)	石 英 斑 岩	小破片、側面に擦痕
	"	89TU15	9.7	5.0	0.7	60	泥 岩 質 粘 板 岩	第5類 下端部に擦痕
	"	89TU15			2.3	( 156)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU16	( 4.4)	( 6.0)	( 4.7)	( 164)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU18	5.8	5.4	2.4	114	石 英 斑 岩	第2類
	"	89TU18	9.4	6.2	2.3	206	結 晶 片 岩	第3類 下端部に擦痕
	"	89TU22				( 158)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU24	7.9	7.2	3.8	326	石 英 斑 岩	第2類 側面に擦痕
	"	89TU24	7.6	6.6	3.5	266	石 英 斑 岩	第2類 側縁に擦痕
	"	89TU24				( 374)	粘 板 岩	小破片
	"	89TU24				( 72)	粘 板 岩	小破片

表4 出土石器計測表(4)

挿図・ 図版番号	器 種	登録番号	計 測 値				石 材	備 考
			長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
	磨石・敲石	89TU24	9.5	6.7	4.7	447	石英斑岩	第1類 側縁に擦痕。表面に敲打による凹み。
	磨石	89TU25			3.7	(234)	石英斑岩	側縁に擦痕
	"	89TU26	5.7	4.7	1.3	57	泥岩質粘板岩	第1類
	"	89TU26	7.6	5.1	1.6	119	石英斑岩	第1類
	"	89TU26	7.4	3.9	2.5	120	石英斑岩	第3類
	"	89TU27	7.3	6.1	2.1	129	石英斑岩	第1類 側縁に擦痕
	"	89TU27				(464)	石英斑岩	破片。側縁に擦痕
	"	89TU27	6.5	5.6	2.9	156	石英斑岩	第2類 風化激しい
	"	89TU27	8.2	6.9	5.4	508	泥岩質粘板岩	第4類 ほぼ全面に擦痕
	磨石・敲石	89TU28				77	粘板岩	小破片
	磨石	89TU28	8.5	7.6	5.9	619	泥岩質粘板岩	第4類 1面に擦痕
	"	89TU28	7.1	6.2	2.3	120	泥岩質粘板岩	第4類 石材の折損面を磨面として使用
	"	89TU28	8.4	(4.4)	2.9	133	石英斑岩	第1類 側縁に擦痕
	敲石	89TU28	13.0	10.2	3.0	535	石英斑岩	第4類 下端に敲打による剥落有り。
	磨石	89TU28	13.2	9.3	4.9	878	石英斑岩	第1類 両側面に擦痕
	磨石・敲石	89TU28	(13.3)	9.9	4.0	726	石英斑岩	第1類 側縁に擦痕。下端に敲打による剥落有り。
	磨石	89TU29	6.2	6.3	3.3	184	石英斑岩	第4類 石材の折損面を磨面として使用
	"	89TU31	7.2	6.7	3.8	400	石英斑岩	第2類
	"	89TU32	(6.7)	4.3	2.6	(146)	泥岩質粘板岩	第3類
	"	89TU33				(44)	泥岩質粘板岩	小破片
	"	89TU33				(60)	凝灰岩質粘板岩	小破片
	"	89TU34				(79)	石英斑岩	小破片
	"	89TU35				(102)	石英斑岩	小破片
	"	89TU35				(61)	石英斑岩	小破片
	"	89TU35				(124)	石英斑岩	小破片、側縁に擦痕
	敲石	89TU36	(11.0)	5.8	1.7	(157)	石英斑岩	第3類 下端に敲打による剥落あり。
	磨石	89TU36				(132)	石英斑岩	小破片
	"	89TU36	(9.9)	(11.3)	(7.0)	(1340)	石英斑岩	第5類 下端部に擦痕
	"	89TU36	6.8	5.7	2.9	116	石英斑岩	第1類
	"	89TU36				(148)	石英斑岩	小破片
	"	89TU36				(68)	石英斑岩	小破片
	"	89TU38				(48)	砂岩質粘板岩	小破片
	"	89TU38	6.3	4.8	2.7	124	石英斑岩	第1類
	"	89TU44	11.8	10.2	5.0	893	石英斑岩	第2類 周縁に擦痕
	"	89TU44	13.6	11.0	4.9	815	粘板岩	第4類 側縁に擦痕
	磨石・敲石	89TU45	10.7	10.4	4.9	744	石英斑岩	第2類 側縁に擦痕。表裏面に敲打による凹み。
	磨石	89TU45	(6.4)	4.9	2.3	(96)	石英斑岩	第3類 下端に擦痕
	"	89TU45	11.6	5.1	4.8	407	石英斑岩	第4類 石材の折損面を磨面として使用
	"	89TU45	22.3	11.9	7.8	3362	石英斑岩	第5類 下縁に擦痕
	"	89TU45				72	泥岩質粘板岩	小破片
	"	89TU45	6.7	5.2	2.2	111	凝灰岩質粘板岩	第1類
	"	89TU45	7.6	7.0	4.1	313	凝灰岩質粘板岩	第2類
	"	89TU45				(80)	石英斑岩	小破片
	磨石・敲石	89TU45	13.6	(11.3)	5.4	1170	石英斑岩	第2類 側面に擦痕。表面に敲打による凹み。
	磨石	89TU46	6.7	5.6	2.2	125	石英斑岩	第2類 側縁に擦痕
	"	89TU46			2.5	(84)	凝灰岩	
	"	89TU46	11.3	9.1	4.9	761	石英斑岩	第1類 周縁に擦痕
	"	89TU48				(70)	砂岩質粘板岩	第1類 小破片
	"	89TU48				(123)	石英斑岩	第1類 小破片
	"	89TU48	6.0	5.8	5.2	216	粘板岩	第4類 石材の折損面を磨面として使用
	"	89TU48				(171)	石英斑岩	小破片
	"	89TU48				(344)	石英斑岩	小破片、風化激しい
	磨石	89TU48	10.5	9.6	5.6	963	泥岩質粘板岩	第4類 側縁に擦痕

表5 出土石器計測表(5)

挿図・ 図版番号	器 種	登録番号	計 測 値				石 材	備 考
			長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
23 100 102	磨 石	89TU49				( 49)	泥岩質粘板岩	小破片
	"	89TU50				( 86)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU51				( 90)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU53				( 150)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU54	9.9	5.8	3.0	264	石 英 斑 岩	第1類 両側縁に擦痕
	"	89TU54	( 8.4)	6.3	3.3	286	泥岩質粘板岩	第1類 側縁に擦痕
	"	89TU55	7.6	5.6	3.3	207	石 英 斑 岩	第1類
	"	89TU56	6.5	5.3	2.2	117	石 英 斑 岩	第1類
	"	89TU56	6.5	6.1	2.1	119	石 英 斑 岩	第2類
	"	89TU56	8.1	5.7	3.3	213	石 英 斑 岩	第1類
	"	89TU58				( 82)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU63				( 96)	泥岩質粘板岩	小破片
	"	89TU63				( 54)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU67				( 54)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU67	( 7.4)	7.3	3.9	( 255)	石 英 斑 岩	第1類 側縁に擦痕
	磨石・敲石	89TU70	10.6	8.2	3.9	557	石 英 斑 岩	第1類 両側面に擦痕。表裏面に敲打による凹み。
	磨 石	89TU71				( 117)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU72				( 12)	砂岩質粘板岩	小破片
	"	89TU72				( 30)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU72				( 12)	泥岩質粘板岩	小破片
	"	89TU74				( 118)	泥岩質粘板岩	小破片
	磨石・敲石	89TU75	(10.5)	5.9	3.0	( 255)	石 英 斑 岩	第3類 側縁に擦痕。下端に敲打による剥落あり。
	磨 石	89TU76	( 6.2)	5.4	1.9	( 80)	石 英 斑 岩	第5類 下端に擦痕
	"	89TU81				( 194)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU81	10.1	4.9	2.4	172	石 英 斑 岩	第3類
	"	89TU82	6.9	7.1	2.8	206	石 英 斑 岩	第2類
	"	89TU86			2.5	( 177)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU86	5.6	3.6	3.1	96	石 英 斑 岩	第1類
	"	89TU89				( 80)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU91				( 106)	石 英 斑 岩	小破片
	"	89TU95	(11.5)	(11.8)	( 7.7)	(1370)	石 英 斑 岩	第5類
	"	89TU95	5.6	4.0	2.9	98	石 英 斑 岩	第1類
	"	89TU95				( 58)	凝灰岩質粘板岩	小破片
	"					( 68)	粘 板 岩	小破片
	"					( 154)	石 英 斑 岩	小破片
	"					( 112)	石 英 斑 岩	小破片
	"					( 92)	石 英 斑 岩	小破片
23 100 102	砥 石	89TU27	5.1	5.6	2.6	122	砂 岩	6面を使用、4本の溝有り。
	"		( 7.4)	( 5.9)	2.9	( 230)	石 英 斑 岩	表面及び側面を使用
	"	89TU48	18.5	10.2	2.7	869	石 英 斑 岩	表裏面を使用
	"	89TU 6	( 7.2)	( 7.7)	2.5	( 206)	石 英 斑 岩	1面のみ使用
	"	89TU23	( 6.2)	( 8.9)	1.0	( 110)	石 英 斑 岩	板石タイプ1面のみ使用
	"	89TU48	( 7.0)	( 7.6)	2.6	( 201)	石 英 斑 岩	板石タイプ1面のみ使用
	"	89TU48			3.2	( 291)	石 英 斑 岩	1面のみ使用
	"	89TU48	8.7	3.9	2.8	135	砂 岩	表裏面を使用
103 104 105	石 皿	89TU26			1.2	( 42)	石 英 斑 岩	1面のみ使用
	"	89TU44	(21.3)	(14.4)	9.8	(1525)	石 英 斑 岩	破片、使用面は広く浅い。
	"	89TU94	34.0	(29.0)	9.5	(3270)	石 英 斑 岩	使用面は広く浅い。
					9.8		石 英 斑 岩	使用面は狭く深い。